No One Knows Everything

新藤悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｏ　Ｏｎｅ　Ｋｎｏｗｓ　Ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ

【Ｎコード】
Ｎ７０２４Ｙ

【作者名】
新藤悟

【あらすじ】
僕に何ができるというのだろうか。未来を見るしかできないこの僕に――

毎日を怠惰に過ごす高校生、空深・夜のクラスにある日、転校生がやってくる。その転校生、浅海・圭はある目的を持って夜のいる街にやってきた。
圭の秘密を知ってしまった夜は、半ば強制される形で彼女に協力を約束する。

※この作品は投稿サイト「Ａｒｃａｄｉａ」様にも投稿させて頂いてます。

―0th Bad Dream Believer―

―0th Bad Dream Believer―

雨がひどく降っていた。
とても、とてもひどい雨で、そしてとても冷たい雨だった。
それが僕の頬を打つ。叩きつける様に撃ちつける。痛いくらいに激しいけれど、今の僕にはそれを感じることはできない。
空を見上げる。仰向けで見上げるそれはとても狭くて、とても黒かった。

遠くで雷が鳴った。一瞬だけ稲光が眩く光って、遅れて雷鳴が響く。
体が動かない。寒い。痛みは、無い。
湿った草と土の匂いがする。それは最近嗅ぐことが少なかった雨の匂いだ。雨の香りが鉄臭い匂いに混じって僕の中へと入っていく。
だけど、ダメだ。眠い。閉じていくまぶたと一緒に香りも去っていって、僕はもう何も感じなくなっていった。ただ聴覚だけは最後まで残っていた。段々と小さくなっていく周囲の音の中で、どこからか甲高い音が響いていた。その音さえ小さくなっていって、やがて消えた。

「おい、君！　大丈夫か！？　おい！」

いい感じで眠ってしまいそうだったのに、誰かに体を叩かれる。何度も何度も耳元で叫んでどうにも眠れない。だから僕は閉じたまぶたをゆっくりと開いた。

「良かった、生きてる……！　おい！　こっちだ！　こっちに担架を回してくれ！」

眼を覚ませば男の人がずぶ濡れでいた。レインコートを来て、よく見えないけど頭にはヘルメットをかぶっているらしい。男の人は膝をついて、僕に話しかけ続けた。でもよく分からない。何を言っているのだろうか、この人は。僕はただ眠ろうとしていただけなのに。眠気に負けて再度まぶたが閉じようとする。だけど、男の人はそれを許してくれない。まぶたが下がりかけるその度に体を叩き、耳元で大声を叫ぶ。

「もう大丈夫だぞ、すぐ助けてやるからな……おい！　早くしろ！」
「待ってくれ、今行く！」

寝ている僕のすぐそばに真っ白な担架が運ばれてきた。雨が弾けてシーツがあっという間に濡れていく。僕は男の人に両脇を抱えられ、寝ていた場所から引きずりだされると、その冷たいベッドの上に寝かされた。

「君！　どこか痛いところはあるか！？」

どこも痛いところなんて無い。だからもう僕を寝かせてくれないか。そんな気持ちを込めて首を横に振った。すると僕に話しかけてきていた男の人の汚れた顔が少し緩んだのが分かった。
手で合図されて僕を乗せた担架が何処かへ運ばれていく。雨の音に

混じってカタカタとキャスターが音を奏でる。
遠くでもう一度雷鳴が響いた。
白い、車に僕は向かっていく。真っ赤な赤色灯が夜に近い世界を染めあげていた。

「そっちはどうだ？」
「……ダメだ。心音も脈も確認できない。とにかくまずは車から外に出すぞ！」

その声に僕は少しだけ顔を動かした。うすぼやけた視界の中に、ひしゃげてひっくり返った車が入ってきた。そこから引き摺り出された一組の男女。だけど、二人共だらりとしていて、ちっとも動きやしない。

「だから……言ったのに」

今日は遊びに行くのは止めようって。きっと良くないことが起きるから家に居ようって言ったのに。なのに、父さんも母さんも頑固なんだから。

（せっかく久々に夜と一緒にいれるのに、遊びに行かなくてどうするんだ！？）
（いっつも夜ちゃんには寂しい想いさせちゃってるんだから、今日くらいは母親らしいことをさせて。ね？）

そんな事言うもんだから、僕も断りきれないで。きっと何も起きないだなんて、そんな有り得ない空想を信じてしまったんだ。
自分が犯してしまった罪。とても痛くてとても悲しくて、なのにため息も出ないし、涙も出ない。
担架が揺れて、扉が閉まってく。それに合わせて僕も眼を閉じた。

救急を告げる音が何処か遠く聞こえる。
全ての感覚が消えて行く中で、僕は思った。
僕は、無力だ。

―１ｓｔ　浅い空、深い海―（前書き）

感想を頂けたら嬉しいです。宜しくお願い致します。

―1st　浅い空、深い海―

―1st　浅い空、深い海―

朝なんてものは黙っててもやってくる。どんなにやってこなくていいと思っていても胸糞悪いまでに呆気無く朝日なんてもものは昇り始めて、外が曇りだろうが土砂降りだろうが僕という存在を眠りというこれ以上ない最高に快適な状態から覚醒させてくれる。例え窓際に垂れ下がるカーテンが遮光性の強いものであっても、だ。まったくもって有難迷惑千万。そのまま寝かせておいてくれてもいいのに。

とはいえ、人は一日寝たままではいられない。赤ちゃんには赤ちゃんなりにやらなければならないことはあるし、成長すれば成長するだけそれは増える。それは当然僕という人間にも当てはまるし、残念なことにそれをしないと年長者からのゲンコツか叱責というありがたくも何ともないものが降り掛かってくる。

朝からそんなものを受けたいほどに僕は人生に退屈はしていないし、だから一度開いたまぶたがまた閉じてしまわない内に無理矢理に体を起こした。

「……」

だからといって本当の意味で眼が覚めるかといえばそうでもない。まぶたは半開きだし、頭は全くといっていいほど働きやしない。敷きっぱなしの煎餅と化した布団の上に鎮座すること五分。ようやく僕は活動を始める。

ノロノロとした足取りで水漏れがしてそうな風呂場へ。シャツとトランクスを脱ぎ捨てて蛇口をひねる。そして必ず浴びるのだ。熱湯を。

「あちゃちゃちゃちゃちゃちゃちゃっちゃっちゃっちゃい！！」

どういう原理なのかはサッパリなのだが、ウチのシャワーは水をひねっても最初に熱湯が出てくる。ここに住み始めてもう相当になるのだからいい加減学べばいいのにと我ながら思うけど、やってしまうものは仕方がない。だって朝は頭が働かないのだ。それほどまでに僕は朝が弱い。

温度がようやく落ち着いたシャワーで覚醒し、寝ぐせだらけの茶色い髪の毛を整える。十分くらい浴びると、風呂場で歯を磨いて、前日の夜に準備してあった着替えを手にとって、使い捨てのコンタクトを付ける。アクビを堪えながら真っ黒な、もうすでに時代錯誤と言うか骨董品、生きた化石に等しい学ランを着替えると、また布団の上に座ってテレビを見ることしばし。面白くも何ともない、ニュースなのかバラエティなのか情報番組なのかサッパリ分からないテレビを眺めてから家を出た。

ようやく動けるようになったとは言っても眠いものは眠い。アクビで眼に溜まった涙を右手で拭いながら自分が出てきた建物を見る。木造の誰がどう見ても、百人聞けば百人がボロ屋と答えるだろう古ぼけたアパートが風に吹かれて軋み音を立てている。当然毎日見ているものだから見慣れてはいるのだけれど、この築何十年か分からない建物がどうして未だに崩壊せずに残っているのかが不思議でな

らない。今この瞬間に崩れてもおかしくないと思う。もっとも、そうなったら困るのは自分ではあるが。
何十回とアクビをしながら、すっかり主流になった電気自動車から流れる、ガソリン車の擬似エンジン音を耳にしつつ十五分も歩けば我が母校が見えてくる。天気は快晴とは行かず、晴れてるとも曇っているともいえない微妙な状態。寝ているのか起きているのか分からない、さながら我が頭脳といったところか。
誠に当たり前ながら学生というのは僕だけでは無いので、校門の前には続々と他の生徒が集っている。さすがにココまで来れば眠いとはいってもある程度眼は覚める。校門の前は騒がしいけど、僕が近づくと同時にみんなの空気が若干硬くなるのが分かる程度には。

「うっす、夜。おはよう。相変わらず眠そうな顔してんな」
「あ〜……真か。おはよう……」

下向きの顔を上に向ければ、頭ひとつデカイ真――朝霧真がいた。見てると眩しくなるくらいに金色に染めた、ツンツンに突っ立った髪の毛が見える。
真は僕の頭に手を乗せてグシャグシャと撫で回した。

「朝なんだから元気だせよ！　一日がもったいないじゃねーか。あ、でもお前は一日中眠くてもしょうがねーのか。名前が『夜』だけに」
「名前の事はほっとけ。あと、そんなドヤ顔されても全然うまくないからな。ついでに言うとその手のネタはとっくに使い古されてる」
何せ生まれた時から「夜」なのだから17年間散々イジられてきた。最初はイヤでこんな名前を付けた我が親をちょっと恨んだりもしたが、もうすっかり慣れきってしまったし、この歳になってまでそんなイジリ方をするような奴はいない。真以外には。

「いつまで経っても色あせない鉄板ネタ！　生まれつき持ってるヤツが羨ましいぜ！」
「色々とツッコミたいところだな……」

とは言え、朝からメンドクサイからツッコまないけど。
そんな疲れる会話を交わしながら毎朝の様に眼を覚まして、気がつけばいつの間にか上履きに履き替えてて廊下を歩いてた。隣で真が何やら話しかけてるけど、それを適当にあしらいながら教室へ向かう。
朝の廊下は登校した他の生徒たちで混み合っててざわついているけど、僕ら二人が近づくとピタリと会話を止めて、端っこ避けてそそくさと早足で通り過ぎる。そして僕らと距離ができると、また何事も無かったかの様に話し始めるのを僕は背中で聞いていた。
僕らは学校だと嫌われ者だ。いや、嫌われ者とはちょっと違うか。正確には怖がられてる。僕が通ってる学校は真面目でお固い生徒が多いからか、いわゆる不良と呼ばれる生徒はいない。僕と真くらいだろうか。もっとも僕も真も不良でいるつもりはないけど。いや、真は僕から見ても不良生徒か。本人に自覚は無いだろうけど。
ステレオタイプだけど、髪染めて時々授業サボってれば周囲からは「ヤンキー」に見えるらしい。加えて有ること無いこと噂も広まるから、ますますそのイメージが固まってしまう。そんなイメージが先行して周囲は僕らが怖いらしいのだ。こんな一六〇ｃｍにも満たない人畜無害な細身の少年のどこが怖いのか、いまいち理解に苦しむけど。

「いやいや、人畜無害じゃねーだろ。聞いたぜ、こないだも工業の奴らに絡まれたんだってな？」
「あー……そう言えばそんな事もあったな。なんか道歩いてるだけで絡まれるんだよな。カモに見えるんだろうな」
「見た目はちびっ子が粋がってるみたいだしな」

「やかましいわ」

と、何やらペチャクチャと話しかけていると、真が視線を僕から正面へと向けて手をブンブンと大きく振り始めた。

「おっはよー、あかりちゃ～ん！」

そして声の先には小柄な女の人。ショートの髪にピンクのカーディガンを羽織って、笑顔でこちらに振り向いた。

「あ、夜クンに真クン。おはよう」

クラスの名簿を胸の前に抱きかかえて、微笑みながら可愛らしい声で応える。コッチに歩いてきながら唇を尖らせて、大きな眼を無理やり吊り上げて怒ってますよ、とアピールしながら真に注意する。小柄な体格と幼さの残る顔、それに何となく「フワフワ」って表現が似合いそうな雰囲気のせいで男子生徒からは人気が高い。事実、彼女の怒った顔を見て周囲の男子生徒は顔をニヤつかせながら通り過ぎてる。

「こーら。ちゃんと『三上先生』って呼びなさい。あと、学生服はキチンと一番上のボタンまで止めること」

そう言いながらあかりちゃんは真の首下に手を伸ばした。そして周囲をキョロキョロと見回して誰もコチラに注意を払ってないことを確認すると、唐突に真の顔を引き寄せる。

「……何回注意させんだよ、真ォ。テメェの頭は鳥並みか、ええ？」

「いやぁ、あかりちゃんの……」

「『三上先生』だろぉ？　タマ潰すぞ？」

「ゴメンナサイ……」

ヤクザ真っ青なドスの効いた低い声とともに睨みつけられて、真は今日もあかりちゃんに素直です。

「だから、今度からはちゃんとしてきてね？　三上先生からのオ・ネ・ガ・イだからね」

真を解放するとあかりちゃんはニッコリと笑ってウインクした。それを目撃した男子生徒が頬を赤らめたりしてるから手に負えない。対象となった真の顔は若干青ざめてるけど。

「相変わらずうまいなぁ……」

「何か言った、夜クン？」

「いえ、ただ三上先生は可愛いなぁって思っただけです」

「そう？　それなら良し！」

別に被虐願望があるわけじゃないからあかりちゃんには逆らわない。この世界で生きていくためには処世術は大事なのだ。

「何やら騒がしいと思えば、またお前か、朝霧、空深」

あかりちゃんの後ろから小言を言いながら男性教師が近づいてくる。長身・細身で女子生徒にモテる、いわゆるイケメンというやつなのだが、どうにも好きになれない。高圧的な態度で接してきて僕や真を目の敵にしてるし、やたらと男子生徒に厳しい。特に僕と真には、たまに難癖をつけてるとしか思えない時もあるし、ムカツクやつだ。そう言えばコイツの名前なんだっけ？

「別に騒いで無いっすよ。ちょっとあかり……三上先生と話してた

だけじゃないっすか」
「教師に口答えするな。だいたいなんだ、その髪は。空深も。ちゃんと黒くして来いって言っただろうが」
「いやいや、校則だと髪の色まで決められてないじゃないっすか。それに中間テストで全教科平均点取ったら認めてやるって言ったの、先生じゃないっすか」
「見逃してやるとは言ったが、認めるとは言ってない。三上先生も、もっと厳しく指導して下さい。担任の三上先生が甘いからコイツらがつけあがるんですよ」

矛先があかりちゃんに向かったところで、あかりちゃんは露骨に舌打ちして顔をしかめた。しかめたっていうか、歪めたというか、言葉に出すのもはばかられる程スゲェ顔をした。向かい合ってた真なんて素で引いてるし。気持ちは分かるんだけど、あかりちゃん、顔崩れすぎじゃね？

「そんな事無いですよ？　朝霧クンも空深クンも、見た目こそこんな風ですけど、とっても良い生徒です。成績も悪いわけじゃないですし、素行に特別問題があるわけじゃありません」
「しかしそこの空深もこの前他校の生徒と……」
「アレは向こうに全面的に問題があったということで話が着いたはずです。先生もそれで納得なさったじゃありませんか」
「それはそうですが……」
「ですが、ご忠告として有難く頂戴致します。
それじゃもうすぐチャイムがなりますから失礼しますね。先生もホームルームに遅れますよ？」

口ごもった先生にあかりちゃんは一息にそう告げると、深々と頭を下げた。どんな顔をして話してたのかは僕の位置からは見えなかったけど、さぞかし今はひどい顔をしてるんだろうな。

一方で先生の方はまだ何やら言い足りなさそうに口元をモゴモゴさせてたけど、反撃の糸口が見つからなかったのか、あかりちゃんに見られないように僕らを睨みつけて去っていった。
廊下を曲って野郎の姿が完全に見えなくなるとあかりちゃんは頭を上げて、真は僕をヘッドロックするとワシャワシャと髪を撫で回した。

「いやぁ、助かったぜ、夜！　お前がこの前のテスト、出るところ教えてくれなかったら完全にアウトだったぜ」
「アレはたまたまピッタシ出ただけだよ。次からは前以て勉強しとけ。それと、お礼言う相手は僕じゃなくて三上先生だろ？」
「おお、そうじゃん！　あかりちゃんも庇ってくれてありがとう！」
「だから名前で呼ぶなと……まあ良い。それよりもさっさと教室に行くぞ」

相変わらず鳥頭の真に、あかりちゃんは今日は諦めたのか深々とため息をついて教室に向かう。たぶん明日もまた同じ光景が繰り返されるんだろうけど。
似たような毎日に退屈しがちな僕だけど、これはこれでいいんだ。あかりちゃんと真のやり取りは面白いし、見てて飽きない。僕は眼を覚ますことができるし、何より、誰も傷つかないから。ここ最近は悪い＞ｒｕｂｙ＜＞ｒｂ＜未来＞／ｒｂ＜＞ｒｔ＜・・＞／ｒｔ＜＞／ｒｕｂｙ＜も見てないし、これからもずっとこんな日々が続けばいいのに、と二人の背中を見ながらそう思う。悪いこと、嫌なことは忘れて、楽しくて嬉しいことだけ覚えていけたら、どれだけ幸せだろうか。

「なあ……」

そんな事をつらつらと考えながらあかりちゃんの後ろを歩いてたけ

ど、ふとあかりちゃんが僕らの方を振り向いて疑問を口にした。

「あの先生の名前、なんだっけ？」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

興味の湧かないものに対しては人なんて何の集中力も持たない。例え興味は無くとも別の原動力、具体的に言えば野心や目標、はたまた義務感や強迫観念でもいい。とりあえずそんな感じで動かすものが無ければ、人の話なんて夢の世界へ誘うだけの、ＲＰＧゲームであるような魔法でしか無い。むしろゲームの魔法より強力だ。

退屈な授業を寝て過ごして昼休みになったはいいけど、僕にはやる事がない。食堂で真と飯食ってしまった後は午後の授業があるまで全くの暇だ。昼休みは大概真はどっかに姿を消すし、他に友達と言える様な奴もいない。教室にいても周りには誰も寄ってこないし、慰めに教室内を見渡してみても大体は仲のいいグループでダベってるか、携帯型ゲームをコッソリと持ち込んで盛り上がってるか、そんな感じ。中には授業で使うＰＣを好き勝手にいじくって、ゲームなんかをインストールしてる奴もいるけど、周りにＩＴが溢れてるこのご時世になってもコンピュータに教師連中は弱いらしく、今のところバレてないらしい。

幸いにして周囲と距離を取るのは自分としても望むところだし、周りと何かに興じている方が個人的には苦痛だから、今の状況は悪くは無いとは思ってる。暇は暇ではあるのだけど。

頭をバリバリと掻きながら僕は教室を出た。気にはならなくても居心地がいいわけじゃない。他者に無関心でも空気は読める。僕が居心地が良くないのと同じように、周りも僕がいるとあまり楽しめないらしい。

「お？」

アテも無くブラブラと、今日も屋上にでも行こうかと人気の無い校舎の端にある廊下へと向かっていると、人気が無いはずの廊下に見覚えのある人影。昼間だというのに節電してるのか薄暗くて、あそこは確か物理室だっただろうか。そこで彼女は両手にプリントを重そうに抱えて、手が塞がってるからか足だけでドアを開けようとしていた。見るからにバランスが悪くて、胸の前で紙が右へ左へと揺れて、彼女もそれに気づいてるのか上半身を左右に揺らして落ちないよう落ちないようにと苦戦してる。まるでヤジロベーみたいに。だけど、だけど残念なことにクラスメートである僕は知っている。彼女に運動神経が無いことを。

果たして、十人この場にいれば十人全員が予想するだろうことを、彼女は期待を裏切ること無くやってのけた。

「何やってんの、森川」

「イタタタタ……あ、空深くん」

強かに打ち付けたお尻をさすりながら涙目で見上げてくる森川。黒髪セミロングの彼女はクラスでも地味な存在だ。休み時間に誰かと話してる姿もほとんど見たことが無いし、ついでに言えば話す時も相手の顔を見ることができない。なるほど、ならば相手が気を抜いていたとはいえ、顔を見て話しかけられた僕は非常に幸運と言うことか。

空からはパラパラと宙に舞ったプリントが降ってきて、パサリと黒

髪の上に落ちてきた。それに気づくと森川は黒縁の眼鏡がズレたまま慌てて紙を拾い始めた。
こんなナリだけど、一応僕は自称不親切ではない。珍しく幸運に巡りあったことだし、他には特にやる事も無いからしゃがみ込んで拾ってやる。

「そ、空深くん……」
「ん？　何？」
「えっと、その……あ、ありがとう」
「どういたしまして。それより、パンツ見えてるよ」
「え？　えっ！？」

教えてあげると、両手にプリントを持ったまま森川はスカートを抑えた。あ、と僕が声を掛ける間もなく、普段の鈍さはどこへやらと言わんばかりの速度で手は振り下ろされて、これまた予想通りにプリントはクシャクシャになってしまう。

「あう……」

さてさて、顔を赤くして涙目になっているのはケツが痛いからか、恥ずかしいからか、それともプリントを潰してしまったからか。好きな人ならそんな姿を見て「可愛いなぁ、ハァハァ」とか心のどっかで悶えるのかもしれないけど、残念ながら僕にはそんな趣味も無ければ興味も無い。気にせず黙ってプリントを集めてやる。

「み、見え、た……？」
「そう言ってるじゃん」
「うぅ……」

おずおずとしてスカートの中が見えないよう足の位置を調整すると、

かおを真っ赤にしたまま森川もプリント集めを再開した。そこまで気にすること無いじゃん、と思わないでもないが、まあ、それは僕が男であると同時に周囲に興味が湧かないという変な性質を持っているからだろう。

「おい、空深。お前、何をしている？」

あらかた集め終わったところで咎めるような声が聞こえた。振り返ればそこには今朝方僕と真に難癖をつけてきた奴がいた。

「笹川先生……」

なるほど、笹川っていうのか。この人の物理の授業を受け始めてすでに数ヶ月が経つけど、そうか、そんな名前だったのか。

「別に。森川がプリント落としたから一緒に拾ってただけですよ」

「……本当か、森川？」

「え、あ、えっと、はい……」

「そうか。後は私が拾っておくから行っていいぞ」

別にアンタの許可を貰う必要はねーよ、と内心で毒づく。露骨に「早くどっか行け」と言わんばかりの視線をプレゼントしてくれて、もうほとんど残っていないプリントを拾うために笹川もしゃがみ込んできた。

まあわざわざこの先生が拾ってくれるっていうんだ。厄介者扱いされてるわけだし、別に嫌な想いしてまでココにいる必要は無い。このムカつく先公に後を任せるべく、僕は立ち上がった。

その時だ。

「う……？」

グニャリと目の前の世界が歪む。天井が歪む、床が歪む、窓が歪む。笹川が歪み、森川が歪む。そして僕が歪む。左右が消え、上下が逆転し、時間が前後する。グルグルとめまいにも似た感覚が僕を包み込んで、気づけば僕は見知らぬ場所に立っていた。
ココはどこか。全く見覚えのない場所を僕は冷静に観察する。そこは何処かの部屋だ。それなりに高そうな一室で、部屋中に衣服やら何やらが散らばっている。潔癖症と間違うほどにキレイにしろとは自分の部屋を棚の上の天井裏にまで上げても決して言えないが、ちっとは片付けたらどうだ、とも思わないでもない。とは言うものの、よくよく見れば部屋の隅に埃とかそういったものは見られない。て言うことは、普段から掃除はやってるってことか。

「あっ！　ああっ！？　あああっ！！」

素っ頓狂な声が聞こえて、どっかで聞いたことある声だな、とか思いながら振り向くとそこにはついさっきまで一緒にいた笹川の姿。
笹川は部屋の残念な惨状を見ると、靴も脱がずに部屋の中へと転がり込んだ。
僕のいた、まさにその場所を通り抜けて。
ガシャガシャとけたたましい音を立てて笹川は部屋中の引き出しをひっくり返していく。

「無い！　無い、無い、無い、無いッ！！」

騒ぎながらアッチコッチを探しまわってその度に絶望したような声を上げた。頭を抱えて笹川は喚く。その叫び声をＢＧＭにその景色はまたグルグルと歪んでいった。

「どうした、空深」

その声にハッと現実に戻る。そこは学校の廊下で、足元には森川と笹川。森川は不思議そうな顔をして、笹川はどこか苛立たしげな目で僕を睨みつけていた。

「いえ、別に……」

「ならさっさと行きなさい」

言われなくてもそうするさ。ここにいる理由は無いし、いたくも無い。

森川は何か言いたそうな顔をしてたけど、結局何も言えずにうつむいてしまった。まあ、いいや。さっさとココを離れよう。

微かな声を背中で聞きながら僕は屋上に向かった。

空は晴れ渡り、鳥は自由に空を駆け回る。よく鳥を自由の象徴として表したり、鳥になりたいとかいう人がいるけど、僕はそうは思わない。確かに大空を飛んでいる鳥は気持ちよさそうで、何の柵も無いように見えるけれど、鳥にだって縛るものはある。鳥は飛べるかもしれないけれど僕らみたいに走りまわることもできないし、きっとできることは僕ら人間のほうが多い。だから僕は例え生まれ変わって鳥になれるとしても、やっぱり人間を選ぶだろう。

だけど。

だけど、もう一度僕になれるとしたら、僕はそんな権利などこの屋上から全力全開で斜め上方四十五度で投げ飛ばしてやる。もっとも、そんな事したら僕の右肩は外れてしまうだろうけど。

できもしない事を妄想するくだらない思考をしながらくだらない街

を見下ろす。五時間目の授業はもうとっくに始まっていて、見下してるはずのグラウンドには誰もいないし誰の声も届いてこない。なのに僕はここでこうして一人座り込んでいた。
先ほど見た景色。アレは恐らく笹川の部屋だったんだろう。あの慌て様からして、たぶん、空き巣にでも入られたか。今までの経験からして、空き巣の被害にあうのは今晩。このタイミングで見えたって事はそれで間違い無いだろう。それ自体は何も思わないし、どうこうする気も無い。どこまで行っても僕は観測者にしか過ぎないのだから。
不意に様々な事が頭を過る暗い記憶。無力な自分。助けられなかった自分。助からなかった人たち。断片たちが頭の中を駆け回って、ひどい頭痛を引き起こす。気持ちが、悪い。
どういうわけか悪い未来だけはやたらとハッキリ僕の持つ何かは見せてくる。その度に憂鬱になって、数え切れない程の未来を見て僕はいつしか慣れてった。
風が頬を撫でた。夏が近い、生温い風だ。木々がざわめき、薄い雲が太陽を覆い隠した。
僕は立ち上がり、出口へと向かう。その途中で街を半眼でもう一度見下ろした。何故か、街に見下ろされている様な気がした。

世界は変わらないし変える気も無い。例えどこかの国で紛争が起ころうが日本で地震が起ころうがテレビでデモ行進の様子が放送されただの放送されないだの誰かが喚いていようがあかりちゃんが化けの皮を剥がして教壇の上で悪態吐いていようが真が財布落として地面にめり込みそうなくらい落ち込んでいようが何も変わらない。

「はーい、おはようございまーす」

さっきのはただの物の例えで、実際には世界は平和で、あかりちゃんは相変わらずの完璧に作り上げられた可愛い声でクラスに向かって挨拶している。真だけは財布を落として沈んでるけど。
あかりちゃんはクラス全体を見渡して欠席者がいない事を確認すると、いつもなら「今日も一日ガンバロー」などと言って教室を出ていくのだけれど、今日は「お知らせがあります」などと言い出してニコリと笑った。

「なんと！　今日からこのクラスに転校生が加わります！」

途端にクラス中がざわつき始める。すでにゴールデンウィークも終わって六月にさしかかろうとしているこの時期に転校なんて、物好きな家族もいたもんだ。

「しかも！　喜べ男子！！　転校生はかっわいい女の子だ！」

おおー、と男子のみならず女子からも歓声が上がる。まあそろそろ二年生のクラスにも慣れてきて、変わらない毎日にマンネリ感が醸しだす頃だ。イベント的なものが欲しくなってるのも分かるし、それを考えればいいきっかけにはなる。
それでも関心が無いヤツは何処にでもいるし、そいつらは退屈そうにあかりちゃんを眺め、僕は僕で眠いから机の上のラップトップを閉じてその上に突っ伏してる。一応顔だけはかろうじて教卓に向けてはいるけれど。

「それじゃ入ってきて～！」

間延びした声がして教室のドアが開く音がする。そして彼女は現れた。

真新しい白い上履きが教室に入り、そこから細い脚が伸びていく。転校生らしいシワ一つ無いチェク柄のフレアスカートが腰を覆って、濃紺ブレザーの裾が揺れる。
髪は長い。腰くらいまで届くだろうか。栗毛色に淡く染められたそれが、彼女が歩く度にハラハラと宙を撫でる。
静かな歩調であかりちゃんの隣に立つと、黒板に向かって丁寧な字で自分の名前を書いていく。カッカッカッ、と小気味いい音を立てて書かれるその文字は女の子にしては珍しく丸くなくて、習字でもやっていたのかな、と思わせるくらいにはキレイだった。

「＞ｒｕｂｙ＜＞ｒｂ＜浅海・圭＞／ｒｂ＜＞ｒｔ＜あさみ・けい＞／ｒｔ＜＞／ｒｕｂｙ＜です。宜しくお願いします」

落ち着いた口調で自分の名前を告げると、彼女はたおやかに腰を折ってお辞儀をした。キレイきっかり四十五度。お手本みたいなお辞儀をして顔を上げたところで僕は初めて彼女の容姿を確認する。
すっきりとした鼻筋にキリッとした眉が印象的か。ややタレ気味な目尻の下には泣きボクロがあり、落ち着いた雰囲気のせいもあってエライ蠱惑的だ。本当に高校二年生だろうか。正直三十手前だと言われても僕は驚かないぞ。
そんな事を考えてたらあかりちゃんと転校生両方に睨まれた。どうやら二人共読心能力があるらしい。なるほど、だからあかりちゃんは独身なのか。
背筋が凍るような思いを意図的に無視して、僕はまた顔を組んだ腕の中に埋めた。呆れた様なため息があかりちゃんから聞こえてきたけどそれも無視。

「それじゃ浅海さんの席は……空深くんの前でいっか」

なんでそうなる。確かに僕の列は他の列より人数は少ないけど、そ

れでもせめて一番前とか後ろとかだろ。ああ、ほら、周りもざわざわとし始めてるじゃないか。僕は人畜有害なんですから止めたほうがいいですよ。

「浅海さんもそれで良い？」

「ええ、構いません」

反論するのもメンドクサイ。ま、どうせそんなに関わりあう事も無いだろうし、最初は絡むこともあるかもしれないけど、すぐに彼女も離れていく。それに反論しても僕の言葉であかりちゃんが考えを改めるとも思わないし、好きにすればいいさ。

「宜しくお願いします、空深さん」

頭上からの大人びた声に僕は軽く手を上げて応えると、そのまま夢の世界に沈み込んでいった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

僕は夜の帳の中に立っていた。いや、立ち尽くしていたと言ってもいい。

まだ宵は浅くて、周りのマンションの廊下にはＬＥＤが光っている。防音の行き届いたマンションは静かで、夜を夜らしい静かな空間を作り上げてる。閑静なんだろう住宅街は人通りも無くて、高級そう

な佇まいが羨ましい。ウチの昭和の時代から有りそうなボロアパートとは大違いだ。ときたま、とっくに滅びた様なガソリンエンジン車が国道から騒音をかき鳴らしてて、それを僕だけが聞いている。生温い風が頬を撫でる。不気味な風だ。まるで、全てを溶かし尽くしてしまいそうで気味が悪い。時折強く吹いて木が不快にざわめいた。狭い路地には街灯が等間隔で並んでて、本来暗いはずの道路を明るく照らしていた。

そんな中で、僕のいる場所は暗い。街灯はチカチカと明滅してて、ひどく目に悪い。

何よりも目に悪いのは赤だ。足元は真っ赤に染まってる。どす黒いような赤いものがドロドロと流れて僕のスニーカーを汚す。

隣には工事現場。緑色のネットに覆われた奥には規則的に鉄骨が組み上げられていて、見上げると首が痛くなるほどに高い。遠く最上部には建設用のクレーンが鎮座してた。

そして僕の目の前には無骨な足場用のパイプが転がっていた。無機質で温かみを全く感じられない。

その隣に彼女も転がっていた。

大の字に手足を広げて、彼女の長い髪は硬いアスファルトに孔雀の羽の様に広がっていた。

眼は見開いたまま。そして瞬きせず微動だにしない。頭の一部が潰れてしまっているのが、点滅する街灯に照らされて分かった。

まだ彼女資材に潰されてから間もないんだろう。広がっていく彼女の血が僕にこびりついていく。

僕は一歩彼女に近づく。ぬちゃり、と今度は音が耳にこびりつく。

顔を覗き込む。僕の知っている顔。

手を見る。ピクリ、と手が動いた気がした。

脚を見る。スカートが布ずれ音を出した。

もう一度顔を見た。

瞳の奥の深淵が僕を覗き込んでいた。

「――っ！！」

ひどく荒い自分の呼吸に我に返る。両目には涙が浮かんでいるのか、机の上にあるはずのＰＣの姿は歪んでいた。何だ、今の光景は。グルグルと思考と視界が周り、考えがまとまらない。まとめようとも思えない。頭があらゆる思考を拒絶する。

何を見ていたのか、思い出せない。思い出せないのに、胸に残る不快感だけははっきりと残っている。思い出せないのに、はっきりと未来を見たことははっきりと思い出せる。

どこまでもはっきりと見えて、匂いも、感触も、全てが本物。肌寒さも、静けさも紛れも無く僕は感じていた。

なんてリアル。

なんて不気味。

なんて――無力。

瞬きをする度に景色が蘇る。それを僕は必死に押しとどめる。

僕は思い出さなきゃいけない。誰に何が起こるのか、それをキチンと記憶に留めなければならない。

だけど今は無理だ。さっきから呼吸が落ち着かない。汗は滴り落ちて机の上に溜りを作ってる。なのに体はひどく寒かった。

「大丈夫？」

あかりちゃんの声に僕はようやく顔を上げた。そこで僕はやっと今が授業中で、自分が立ち上がっているということに気づいた。クラス中が僕を見つめ、怪訝な顔をしている奴もいれば、今にも舌打ちしそうなほどに口を歪めてる奴もいる。

そんな中で真とあかりちゃん、それと森川だけが心配そうに見ていた。

「おいおい、顔真っ青だぞ。保健室に行くか？」
「いや、大丈夫……ちょっと風に当たってくる」

真の提案を断って、僕は廊下の方へと向かう。何より今は落ち着くための時間が必要だ。あんなに、はっきりと生々しく未来を見たのは久々だ。気をつけないと胃の中のものを全て吐き出してしまいそうだった。

重い脚を引きずって歩き出す。

動き出す直前に見た、一つ前の席に座る転校生。僕を見つめる黒い瞳。瞬き一つせずに、細かったはずの眼が大きく見開かれていた。とても黒い黒い瞳。どこまでも深く、底が見えない。それが僕を吸い込んでいく。

知らずの内に僕はその瞳を覗き込んでいた。それと同じく、深淵が僕を覗き込んでいた。

そして僕は意識を失った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

僕は夜道を歩いていた。夜、というには少し早いかもしれない、しかし夕方というには遅い、そんな時間。＞ｒｕｂｙ＜＞ｒｂ＜誰そ彼＞／ｒｂ＜＞ｒｔ＜たそがれ＞／ｒｔ＜＞／ｒｕｂｙ＜というの

が適当かもしれない。
昼間は夏を感じさせるほど暑かったのに、この時間帯は「夏と呼ぶにはまだ早い」と地球が主張しているように涼やかだ。だけど風はどこかまとわりつくようで気持ちの悪さは残る。
気を失った僕が目覚めたらすでに放課後だった。保健室には誰もおらず、校舎は奇妙な沈黙が跋扈していて広いグラウンドからは野球部の威勢の良い掛け声が響いていた。
僕は部屋を飛び出した。適当に書き置きを養護教諭の机の上に置いて、教室に置いてあるカバンもそのままに暗くなり始めた街へ出ていった。
街中を歩きながら夢で見た未来を思い返す。十分寝たからか、思い出しても感情が揺れる事は無くて冷静に、客観的に記憶を辿る。
夢の中で見た彼女は間違いなく転校してきた女の子だ。名前は……浅海って言っていただろうか。地面に横たわっていた彼女の身に何が起きたか、現場の状況を思い出せば想像するのは真の奴でも分かるくらいに容易い。
事が起こる場所については分かる。あの景色には見覚えがあった。前にあの近くに住んでいたことがあって、もうずいぶんと昔の話だ。引っ越してから間もなくビルが沢山建ち始めて、見える景色は変わってしまったけど、だいたいの場所は見当がつく。
風が強く吹きつけ、僕は眼をつむる。すでに現場近くにはたどり着いている。ココから見える建設中のビルは三箇所。ほぼ同時期に建設が始まったのか、どれも進み具合は同じくらいで、夢で見た未来の映像だけだと判別ができない。

「勘で探すしか無いのかよ……」

ひとりごちながら僕は脚を走らせる。時間はすでに無い。太陽は沈んでほとんど夜と表現しても差し支えないくらいになっている。夜の色に染まってしまった雲の流れは速い。

走りながら、僕は考えた。今、僕がこうして走っている事に意味はあるのだろうか、と。
どれだけ頑張っても、何も変わらない。そう、何も変らないのだ。
通学路で交通事故死する奴を止めた。次の日に同じ場所ではねられて死んだ。
飛び降り自殺する高校生を説得した。彼女はその夜にフェンスが壊れて転落死した。
銀行強盗が人質を射殺する未来を見た。あらかじめ通報すると、人質は別の銀行で強盗に射殺された。
僕が何をしても、結果は同じ。誰一人として助けられなかった。
それから僕は諦めた。気力を無くした。何を見ても、何をすることも無くなった。
怠惰に毎日を過ごし、判を押したように同じ毎日を過ごす。それ以来、悪い未来を見ることは少なくなっていった。だから僕はそれに満足した。
なら僕はなぜこうして走っているのだろうか。夢見が悪いから？彼女を助けたいから？暇だったからか？
息を切らしながら、クラスメートの姿を探す。風が強く吹きすさび、それが僕の足を止めようとしてくる。
理由探しなんて後ですればいい。自分に言い聞かせて、現場付近を走りまわる。
汗が額から流れ、眼に入って痛む。全く、なんて割りに合わない。
そう吐き捨てながら僕は今日来たばかりの女の子を探す。

辺りがほぼ真っ暗になり、全身が汗にまみれた頃、僕は彼女の姿を認めた。
街灯が路地を明るく照らし、その内の一つが黒く点滅していた。
強風が彼女の髪を揺らし、鮮やかに広がる。何も知らずに無垢な歩みを進めていた。
そばには建設途中のビル。遠くの国道から静まり返った住宅街に車

のエンジン音が響いた。
そして空には黒い影があった。
不安定だった足場が強風にあおられて揺れる。
僕は走った。
足場が倒れた。

「浅海ィッ！！」

手を伸ばす。声に振り向いた彼女の顔が見える。感情に乏しい表情に乗っかった黒い眼が僕を覗きこんでいた。
浅海に向かって伸びた腕が、彼女に届く。
だけど、彼女は消えた。音も消えた。
彼女はどこに消えた？こちらを見ていた浅海圭はどこに行ってしまったのか？右を見ても左を見ても彼女の姿はない。
崩壊した鉄パイプ類が足元に転がって靴へぶつかる。地面を見ると、パイプが赤い水の中に沈んでいた。
彼女はそこにいた。眼を大きく見開いて無感情に僕を見上げていた。染み付いていく血の匂い。孔雀の様に彼女の髪が地面に広がった。
見上げる彼女を僕は見下ろす。僕を彼女の動かない視線が責め立てる。
一歩、後退った。そして左足が後ろへ下がる。右足、左足。右脚、左脚。交互にそいつらが動いていく。勝手に動いていく。

そこから先は記憶に無い。気がつけば聞きなれた目覚ましがなっていた。
頭が働かないままに目覚ましを止め、ＴＶをつけて風呂場へと向かう。シャワーを浴びながら歯を磨いて眼が覚めるのを待つ。いつもは熱湯が出るはずのシャワーは、今日は機嫌が良いらしく素直に適温のお湯を出してくれた。
制服に着替えて、煎餅布団に腰を下ろしＴＶを眺める。興味の無い

ワイドショーチックな芸能ニュースを垂れ流し、タレントと化した女子アナが大げさにコメントを述べているのをただボーっと見ていた。

「さて、と……そろそろ行くか……」

アクビを何となく噛み殺してカバンを探してる途中で気づく。そう言えば昨日学校に置きっぱなしだったな。中に入れていた財布は大丈夫だろうか。

「ま、いっか……別に取られても大して額は入ってないし」

気にしたてしょうがない。残ってれば良し、無くてもそれまでだ。そうなったらどうせ見つかりはしないだろうし。

風が吹けば崩れそうなボロアパートを出て人通りの少ない通学路を歩く。天気は良くなくて、曇っているせいかちょっと肌寒い。

「――続いてのニュースです。昨日、神奈川県横浜市内の建設現場で建設用に組まれた足場が倒壊するという事故がありました。事故があったのは南区和泉のマンション建設現場で、十五階付近、高さ四十メートルの所から、昨日の強風に煽られて足場が崩れて落下。一時現場は騒然となりました。幸い、事故当時現場付近には作業員や通行人はおらず、けが人などはいない、との事です」

いつもどおりに学校に向かったわけだけど、どういう訳だかいつもより通りに人は少ない。それは学校近くまで行っても変わらなくて、ポツリポツリとしか生徒の姿も見えない。

「……？　今日、何かあったっけ？」

見慣れない光景に頭をボリボリ掻きながら腕時計を見る。なるほど、人がいないはずだ。いつもより二十分くらい早い。どうやらウチの目覚まし時計は狂っていたらしい。

だからといって今更ウチに帰る時間も無い。ちっとばかし早いが、たまには早めに学校にいるのもいいだろう。どうせやる事は変らないし。

誰もいない教室で、あかりちゃんが来るまで一眠りでもするか、とか考えながら玄関を抜けて教室に向かう。誰もいない廊下はいつもと違って静かで、どこかひんやりとした、神秘的な雰囲気を持っているように感じられた。

慣れ親しんだ廊下を歩き、教室へ。恐らく誰もいないだろうその中へと入るべく、僕は扉を軽やかにスライドさせた。

「おはよう、空深くん？」

いるはずのない彼女が、そこにいた。

「――浅海、圭……」

―2nd Who Can Understand Me?―

―2nd Who Can Understand Me?―

「おはよう、空深くん？」

いるはずのない彼女がそこにいた。

たおやかに微笑み、小さく頭を下げた彼女の姿に僕は思わず足を止めた。

なぜだ、どうして彼女がココにいる。彼女は……死んだはずじゃなかったのか。崩れた足場に潰されて何も言わない暗い瞳で僕を睨んでたじゃないか。

まさか生きていたというのか。僕が見た時はまだ生きていて、単に気を失っていただけとか。でもそれはそれでおかしい。僕は浅海の顔を見た。

妖艶に笑う彼女が怪我をしている様子はない。確かに、昨日見た彼女は怪我をしていた。真っ赤な血が流れ落ちて、それこそ死人と見間違う程に、生きていたとしても重傷で、翌日にこんなにピンピンした様子で登校できるはずは無かった。

なら、彼女は誰だ？彼女は何者だ？浅海、圭は、何だ？

「どうしたの？　ずいぶんと怖い顔してるけど」
気がつけば彼女は目の前にいた。笑みを壊さないままに眼を細めて僕の顔を、眼を覗き込んでくる。見上げた口から吐息がそっとかかる。
「まるで、見ちゃいけないものを見てしまったみたい」
「っ！！」
ゾッとしたものが僕の背筋を走る。思わず僕は伸びてきていた彼女の手を力いっぱい払い飛ばした。
パシッ、という乾いた音が朝の教室に響いた。ハッとしてみれば、ブレザーの袖からのぞく彼女の白い手が赤く染まっていた。さすがに笑みは引っ込んだけど、特に驚いた様子も痛がる様子も無く自分の手を見ていた。
「嫌われちゃったみたいね」
どこか残念そうに言う。その表情に謝罪の言葉がつい出てきそうになったけど、乾いた口のせいでキチンとした音にはならない。
ガラッ、と後ろでドアが開く音がした。振り向くと、森川がいた。
「あ…えっと……」
一体何を勘違いしたんだろうか。森川は僕と浅海の姿を認めるとどこか気まずそうに視線を逸した。しかもどこか顔も赤いし。
「邪魔が入ったわね」
冷たくそう言うと、浅海は「また後でね」と言い残して僕を置き去

りにして教室から出ていった。出ていく時にブツブツと独り言を漏らしている森川に冷たい視線を送りながら。

「ん、いや、でもまさか、そんな……うん、大丈夫、大丈夫……」

「森川」

「転校してきたばっかりなのに……でも、愛に時間は関係ないって言うし……」

当の森川はと言えば、浅海の凍える視線にも気づかず頬を染めたり悶えたりと一人遊びに忙しいらしい。今まで森川の事をほとんど意識してなかったけど、森川ってこんな奴だったのか。みんなの前で今の姿を見せればきっと人気者になってくれるだろう。僕はオコトワリだが。

登校する生徒が増えて廊下がにわかに騒がしくなる。さっきまでのシリアスな教室の空気は吹き飛んで、すっかり緊張が解けてしまった。

頬に手を当ててクネクネとしている森川を現世へと帰還させるべく、もう一度声を掛けた。

「森川」

「あっそそそ空深くんっ！　おおおおはようっ！　ああ浅海さんもおはようございますっ！」

「うん、おはよう」

森川らしくない元気な挨拶をして、これまた元気よく頭を下げた。その拍子に掛けていたメガネが落ちる。次いで肩に掛けていたカバンが滑り落ちて綺麗に真上から完璧に流れる様なタイミングでメガネを潰した。

「あああああっ！？」

「どんまい、森川。あと、浅海はもう居ないよ？」
「えええええっ！？」
世界は今日も朝から元気です。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

鐘が鳴る。鐘が鳴る、とはいっても実際に本物の鐘がなっているわけじゃなくてスピーカーから流れるのは、本物と聞き間違えるかのように精密な電子合成音。無駄なところに技術が使われてるなぁ、と寝起きのボンヤリとした頭で感心しながら背伸びをする。
午前の授業が終わり、担当の先生が出ていくのと間を置かずして教室内は一気に賑やかに。弁当を広げる奴もいれば学食に向かってダッシュしてる奴もいる。

「屋上に来なさい」

唐突に頭上から掛けられる声。見あげれば浅海が僕を見下ろしていた。
一気に意識が覚醒する。よくよく考えれば、彼女の後ろでよくもまああんなに熟睡できたものだ。自分の脳天気さが笑えてくる。

浅海はその一言だけ伝えると、さっさと教室から出て行ってしまった。クラス中が彼女の背中と僕を見つめる。恐らく有り得ない展開だとか好き勝手思ってるんだろう。

「何だ何だぁ、夜よぉ。いきなり美人の転校生といい関係だってかぁ？　女に興味なさそうな顔してやるなぁ、おい。このむっつりスケベ」

「やかましい。何なら僕の代わりにお前が行ってきてくれよ、真」

「んな事できるかよ、バカ夜。圭ちゃんから直々のお誘いだぞ？　ここで行かなきゃ男が廃るってもんだろ？」

「別に廃ってもいいんだけどなぁ……」

ていうか命令だったし。お誘いの空気は微塵も感じなかったぞ。それに用件は朝の続きだろうし、それを考えたらクラスの男子が想像してる様な甘い展開なぞ僕には想像できん。

とはいえ、この空気で拒否もできないし、何より僕自身、彼女がなぜここにいるのか気になるのも事実。大人しく屋上へと向かうか。

「あの……」

教室を出て生き際に森川が声を掛けてくる。だけど朝の元気はどこに行ったのやら、僕が森川を見るとプイ、と眼を逸らしてうつむいてしまった。ちなみに壊れたメガネのアームはセロハンテープで固定されてる。

何か用か、と続けようかとも思ったけど、廊下を歩く笹川の姿が見えたから止めた。きっとアイツのことだから森川と話してるだけで僕が一方的に絡んでると決めつけてメンドクサイ事になるだろうし。だから、森川に小さく手を振って僕は屋上に向かった。

屋上へは日常的に足を運んでるから、そこに至るまでの景色は代わ

り映えしない。同じ校舎なのだから見慣れていようが見慣れていまいが代わり映えはしないのは極当たり前の話で、だけど屋上へ行くのは禁止されてるから、全くといっていいほど人影は無い。それだけで特別な場所である感じがして、僕は好きだ。
人がいない空間というのは良いものだ。誰にも邪魔されず、自分だけの空間であってそこを犯す奴は誰一人としていない。何も僕を煩わせず、だから僕はひどく落ち着くことができる。
ポケットの中から鍵を取り出す。家の鍵の中に混じって、屋上の扉の鍵がある。僕が落ち着くために屋上へ行きたがった時、あかりちゃんがこっそり渡してくれたものだ。その鍵を手で弄びながら屋上への階段を登っていく。
しばらく教室でボーっとしてたから浅海を待たせてしまったな。彼女の事をあまり知らないが（当然だが）、今朝の笑顔とは裏腹にどこか冷たい印象がある。森川を見る眼も冷ややかだったし、昨夜の事といい、得体の知れないところもある。間違いなく何となく文句の一つでも言われそうだ。いや、意外と細かい事は気にしない性質の可能性もある。そうであって欲しい。
階段の最後の踊り場を曲がり、屋上のドアを見ると、浅海がドアにもたれかかって待っていた。眠っているかのように動かずに、眼を閉じてうつむいている。と、僕の気配に気づいたのだろうか、長いまつげがゆっくり持ち上がり、柔らかさのない怜悧な視線が僕を貫いた。

「遅かったわね。女を待たせるなんて、まったくなってないわ。まるでダメダメな男、まるでだめ夫ね。これだから女の子の扱いを知らない童貞むっつりスケベは困るのよ」

のっけからひどい言われようだった。

「むっつりスケベはともかく、僕に経験があるかどうかは知らない

と思うけど？」
「じゃあるのかしら？」
「いや、ないけど」
「……ハッ」

鼻で笑われた。しかも腰に手を当てて見下されて。いや、僕が階段の下にいるから見下ろされるのは当然ではあるけれど。
しかし、経験ある奴もいるかもしれないが、高校生でギシギシアンアンな展開を経験してるヤツは少ないと思うのは僕だけか。

「なら浅海はあるのか？」
「私をそこらの尻の軽い女と一緒にするなんてどういうつもり？
まあ想像するくらいは許してあげるけど」
「けど？」
「肖像権の侵害で訴えてあげる」

許してねえし。

「そんな事より早く鍵を開けなさいよ。まだ私を待たせるつもり？
それともまさか鍵を持って来てないとか言うつもりかしら？」
「そういうそっちは鍵持ってないの？」
「転校二日目で鍵を用意できる程私の尻は軽くないわ」
「その言葉の使い方は間違ってる」

浅海ってこんなキャラだったのか。転校二日目にしてお淑やかだか、オトナっぽいとか言ってるクラスの男子達が聞いたらどんな反応を示してくれるかね。
そんな事を思いながらも、鍵穴に挿し込む。

「何だか鍵を挿すって卑猥ね」

「黙っとけ」

ドアを開けると廊下の湿った空気が抜けて、代わりに爽やかな風が吹き込んでくる。青空が広がって、それを見ていると何とも言えず僕の気持ちも自然に晴れやかになっていってくれる。

背後でドアが閉まる。カチャリ、と鍵が閉まる音がした。

「それで、屋上に来て何の話……」

「動かないで」

唐突に僕の手がひねり上げられた。細い体のどこにそんな力が、と言いたくなるほどに力強くてミシミシと骨がなってるみたい。痛みに顔をしかめて文句を口に仕掛けたところで、冷たい物が僕の首に当たる。

「動いたら、死ぬわよ？」

太陽に反射して金属製の何かが光る。そっと横目で見てみると、鈍色にハサミが輝いていた。それも工作用のハサミじゃない。人を容易く刺せそうな程に鋭く尖った裁ちバサミだった。その先端が僕に向かって押し当てられていた。

「空深、夜。アナタは昨夜何を見たのかしら？」

「な、何を見たって……」

「答えなさい。さもないと、私はアナタを殺さないといけなくなる」

「殺すって……」

「ずいぶんと物騒だと思うでしょう？　でもね、本当にそうしないといけなくなる」

そう言って少しだけハサミが僕に食い込んだ。軽く皮膚が破け、紅

い珠が首筋に浮かんで僕は感じた。彼女は、本気だ。

「私としてもせっかくのクラスメートで、しかも席が前と後ろだなんて親しくなれそうな人を傷つけたくないの。だから正直に答えて。アナタは昨日の夜に何を見たのか」

「それは……」

言っていいものか。浅海が、死んでいた、だなんて。死んだはずの人間が、まだ生きているだなんて。そんな非常識な事があるはずがない。僕が生きているのはフィクションの世界じゃなくて、面白くもない辛いだけの現実だ。だから僕が見た浅海の姿が真実なら、浅海はココにいてはいけない存在なんだ。

「浅海が……死んでいた……」

ならば、今僕の後ろにいる浅海圭は何者だというのだろう？僕と話している彼女は誰なのだろう？

僕は殺されても文句は言わない。たくさんの死を見とってきたんだ。今度は自分の番だとしても不思議には思わない。けれど、僕を殺すのが誰なのか、それは知っておきたかった。

「崩れた足場に潰されて浅海圭は死んでいた。いや、死んでいたかは分からないけど、少なくとも今日明日で治る様な怪我じゃなかった。頭から血を流して、僕の靴を濡らした。真っ黒な動かない瞳で僕を睨みつけていた。だから、浅海圭が今日ココにいる筈はないんだ」

ゆっくりと顔を動かして、ハサミを持つ彼女の顔を見る。じっと漆黒の、死者の瞳で僕を見据えていた。

「君は、誰？」
「……質問をしてるのは私だけど、いいわ。答えてあげる。私は浅海圭。昨日確かに事故で死んで、でも昨日と同じ私がここにいる」
「でも……！」

ならどうして君は生きているんだ。そう続けようとしたけど、彼女のハサミがそれを邪魔をした。

「その前に！　答えなさい。その事を誰かに話したの？」
「……いや、話してない」
「家族にも？」
「僕に家族はいない。それに……僕は逃げた。浅海を死んだままにして僕は逃げた。救急車も呼ばず、警察にも連絡せずに。例え家族がいたとしても話せるもんか」
「そう……」

ハサミが少しだけ首から離れた。やっと解放されるのか。そう思ったけど、彼女の手はそのままだった。

「最後に一つだけ。空深くんの家は事故があった場所とは全然違うはずよ。どうしてアナタが発見したのか、教えなさい」
「それは……」

言葉に詰まる。たまたま用事があって通りかかった。そう答えるのは簡単だ。だけど、ごまかすのはイヤだった。ごまかしたらいけない。根拠も何もないけれど、そんな気がした。
僕は一人だ。誰も僕を理解出来ないし、僕も誰も理解できない。僕の秘密なんて真実共有なんてできないし、そもそも他人の重い秘密なんて共有なんてしたくもないはずだ。でも抱え込み続けるのは難しい。数カ月に一度、他人に全てをぶちまけたくて、吐露したくて、

助けて欲しくなる時がある。辛くて、息苦しくて、生き苦しい。今日という日がちょうどその日にあたったのかもしれない。脅されていた、という言い訳（エクスキューズ）もある。だからか、僕は正直に浅海に話していた。

「僕は……未来が見えるんだ」
「未来が……？　何を言ってるのかしら？」
「嘘に聞こえるかもしれないけど、嘘じゃない。僕には時々、近くにいる人の未来が見えるんだ。それも悪い未来だけははっきりと」
「ふぅん……それでこの前倒れたわけね」
「あまりにもはっきりと……浅海が死んでた姿が見えて、でも目の前の浅海は生きてたからたぶん混乱したんだと思う。放課後に眼を覚ましてから浅海を止めようと思ったんだけど、間に合わなかった。ゴメン」
「どうしてアナタが謝るのよ？」
「助けられなかったから」
「でもアタシはこうして生きているわ」
「痛かったのには変わりないだろ？　だから、ゴメン」

打算混じりの謝罪を吐く。
浅海は僕に刃を向けたまま、じっと考え込んでいる様に黙っていた。動きも、呼吸すら止まっているかの様に静かだった。
どれだけ時間が経ったろうか。状態が変わらないと、緊張も次第に解けてきて、今の身じろぎ一つすらできない姿勢は中々に辛い。だから今の状態を変えるべく、僕の方から彼女に声を掛けた。

「……それで、僕の解答は正解なんだろうか？　いい加減この体勢も辛いものがあるんだけど」
「そうね……いいわ、とりあえずアナタの言葉を信じてあげる」

ただし。ハサミを離しながら、彼女は続けた。

「アナタの話に一片でも嘘が見つかったら、その時点でアナタを殺すから。そしてアナタだけが私の事で知っていること、それを第三者にバラしてもね。それでいいかしら、空深くん？」

「いいも悪いもないだろ？　どうせ選択肢なんか無いんだから」

「別にいいじゃない。女の子とこんな近くで触れ合ったことなんてどうせ無いんでしょ？　役得じゃない」

「命賭けてまで触れ合いたくねえよ」

とはいえ、だ。張り詰めていた空気も解けたし、僕の方もやっと一息つけて思わずため息が出た。

少し痛む首筋を抑えながら後ろを振り向くと、すでに浅海は何処かにハサミを仕舞っていて、姿形も無い。……結構おっきいハサミだったと思うんだけど、何処に隠したんだ？

「いい女には秘密がいっぱいあるのよ。具体的には2つくらい」

「少なっ！？　てか思考を読むな！　ついでにいい女はいきなり刃物を突き出したりしねえし！」

「良いツッコミね。才能あるわよ」

「嬉しくねえよ」

「あら残念」

なら少しは残念がる素振りでも見せやがれ。

そんな僕の心中とはお構いなしに、浅海はクスクスと笑いながら踵を返してドアノブに手を掛けた。

「ちょっと待て。何勝手に帰ろうとしてるんだよ？」

「だってもう昼休み終わるもの。急がないとお昼食べられないじゃない。私は何があろうと一日三食キチンと食べることを自分に課し

てるの。邪魔しないでよ？」
「浅海の信条は知らないけど、まだコッチの質問に答えてもらってない」
「また後で答えてあげるわ。いいでしょ？　どうせ今、知っても後で知っても変わりないんだから。それとも何かしら？　今答えをもらわないと昼から眠れないとか女々しい事を言い出すのかしら？　ハンッ、そんなんだからいつまで経っても童貞なのよ」
「もうその話はいいから……」

眠れないとは言わないけど、気になるのは確かで、午後からずっとこの悶々とした落ち着かないまま過ごさなきゃいけないのかよ。いくら打算が多分に含まれてたからって僕の秘密を明かした対価がそれじゃあんまり過ぎる。
なのに浅海は素知らぬ顔でメンドクサイ結果になるであろう言葉をプレゼントしてくれた。

「あ、そうだ。私、午後からサボるから？」
「は？」
「空深くんの話を聞いて、色々と調べないといけないことができたの。だから先生への説明宜しくね？」
「いや、ちょっと……」
「それじゃそういう事で。またね」

制止も何処吹く風。馬耳東風。馬の耳に念仏。微妙に意味が違ってる慣用句が頭の中に飛び交ってる僕を尻目に、彼女はスタスタと歩いて階下へ消えていった。
残された僕は呆然とせざるを得ず、微妙に赤く染まった首元と先生への言い訳を黙考することしばし。とりあえず全部放棄して不貞寝することを脳内会議で決定すると、この後の真の絡みを想像しつつ、彼女の後を追った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

光陰矢のごとしと言ったのは誰だったか。古典に全くと言っていいほど興味を持たない僕でも知ってる言葉で、だけども言葉を最初に放った人物が誰であったか思い出すことは到底僕のやる気では無理ではあるのだけれど、その言葉の意味というものを実感するのは非常なほどに容易い。何せ目をつむって目を開ければすでに放課後だ。我ながらよく寝たものだと、自分の体に感心すると同時に空恐ろしい物を感じてしまう。

教室に帰り着くやいなやクラス中の視線が僕に集中するのは予想通りで、真がニヤニヤとこれでもかと言わんばかりにニヤつきながら近寄ってくるのもこれまた予想通りではあったけど、いやはや、その第一声までは予想して無かった。

「で……やったのか？」

いやらしい笑みを浮かべて突き立てた中指をクネクネさせながら肩を組んできた真をその場で殴り飛ばさなかった自分をぜひ褒めて欲しい。僕も真に笑いかけ、自分から真の肩に手を伸ばす。真を席に着かせると僕はそっとその頭に手をやる。「おっ！　マジでやったのか！？」と下品に笑う真に微笑みかけると、全力で真の頭を机に

叩きつけてやった。

「……任務完了」

頭から白煙を上げる真を放置すると、僕はそのまま自分の席に突っ伏した。どうにもすぐメンド臭くなってしまうのは僕の悪癖の一つではあるが、これで周りからの不躾な視線も飛んでこないだろうし、たった一つの冴えた殺り方だと信じてる。浅海から受けた理不尽な扱いのストレス解消も兼ねてはいるのを否定はしないけど。授業が始まって浅海の姿を尋ねる先生の声が聞こえたけど、誰も何も言わない。だいたい浅海のサボリの言い訳を僕がしなきゃいけない理由はない。が、頼まれたからにはしないといけないだろう。「気分悪いんで帰りました」とだけつっぷしたまま言ってやると、それきり何も追求が来なかったから僕は安心して安眠モードに入って、以上の事を回想しながら道を歩いてると、いつの間にか家の前に立っていたりするから不思議だ。

「まあ、夕べの事以上に不思議なことなんてそうそう無いだろうけど」

平穏が一番。これ重要。できれば僕の力も一生発動しなくていいんだけど。

「自分でどうにかならないものを考えても無駄か」

独りごちながら結論付けると、見慣れたボロ屋の門をくぐる。二階建ての、風が吹く度にギシギシどころかミシミシと崩壊も近そうな音がするのに、どうにか崩れずにちゃんと建っているのが不思議すぎる。もしかしたらこのアパートの存在自体が一番の不思議現象かもしれない。

鍵を挿し込んで一回し。カチャと音がしてドアノブをひねるけど開かない。
まさか泥棒？そんな疑念が過るけど、誰が好き好んでこんなボロ屋に盗みに入るというのだろうか。いや、セキュリティはザルもザルなのでそういう意味では入りやすいだろうけど。
ともかく、もう一度鍵を回して開錠し、警戒しつつソっとドアを開けて中を覗き込む。
そして中にいた人物を見て呆けたのも仕方ない事だと思う。

「は……？」
「お帰り。早かったわね」

そう言って出迎えてくれたのは、今日の昼間に散々人をいたぶっといてさっさと帰ってしまった女王様だった。しかも制服姿に白いエプロン、頭には三角巾という古風豊かな格好で。

「なにいつまでもそんなとこにつっ立ってるのよ。早く入りなさいよ」
「あ、うん」

目の前の光景にイマイチ頭が付いて行かない。もしかしなくても僕はまだ学校で寝ていて夢を見ているのだろうか？

「ちょっと待ってて。もうすぐで夕飯できるから。あと勝手に部屋も掃除しといたわよ」

浅海の言葉通り、狭い台所からは夕飯のいい匂いが漂ってきてるし、部屋も、元々対して散らかってはいなかったけど、キレイに整頓されててフトンも折りたたまれて端に寄せられていた。
……浅海、だよな？つい内心で確認を取ってしまう。外から帰って

きたらご飯が準備されてるなんて、何年ぶりだろうか。一人は慣れてるはずなのに、どういう訳か鼻の奥がツン、と熱い。トントントン、なんてまな板を叩く音一つ取ってみても懐かしさがこみ上げてきて、浅海の後ろ姿が、死んだ母さんの姿とダブって見えた。

「しっかし、狭い家ねぇ。今にも崩れそうだし部屋は汚いし風呂場なんてカビだらけじゃない。よくもこんな家に住めるものだと初めて空深くんを感心したわ。きっとゴキブリやダニがアナタのお友達なのね。ああ、ゴキブリと同列に語っちゃ可哀想ね。ゴキブリが」

浅海は浅海だった。

ほっとけ、どうせただ物が少ないから整理されて見えるだけで、ほとんど掃除なんてしてない汚くてボロい家に住んでるダメ人間だよ！って違う！

「なんで浅海がここに！？　しかも料理中！？　ていうかどうやってウチを調べた！？　そもそもどうやって入ったんだよ！？」

「昼間も思ったけど相変わらずツッコミのキレが良いわね。Ｍ－１グランプリにでも出たら？」

「ボケなしで！？」

そんな事よりも僕の質問に答えて欲しい。何故に浅海がウチにいて料理なんか作ってるのか。どうやって中に入ったかはこの際眼をつぶって警察には通報しないでいてやるから。

「後でちゃんと話してあげるから、とりあえず風呂にでも入ってらっしゃい。出る頃には夕御飯もできてるから」

「……分かったよ」

何が狙いか分かんないけど、ともかくココは浅海の言う通りにして

おくか。別に盗まれる物は無いし、暖かい飯は出てくるわけだし。まあそれでも一応釘は刺しておこう。

「覗くなよ？」

「ポークビッツを見てほしいの？　とんだ変態ね」

「……」

もう何も言うまい。おとなしく黙ってシャワー浴びてこよう。

「あら、図星？」

「ノーコメントで」

男だって秘密がある方が魅力的だ。そういう事にしておいてくれ。

で。

「……」

「……」

ズズー、と音を立てて二人して食後のお茶を飲んでたりする。流しには食べつくされた皿の山。浅海の料理がどういったものか、もしかしたら料理もどきの真っ黒な正体不明暗黒物質でも出てくるのかとも思ったけどなかなかどうして、久々の手料理だってことを加味しても十分うまかった。美人だし、浅海を彼女にできる男はきっと幸せな気分に浸れるだろう。

「何よ、人の顔をジロジロ見て。誰が視姦する許可を出したというのかしら？　さっさとその汚らしい眼をどかしなさい。肌が腐るわ」

口の悪さにさえ眼をつむれば。

「それで、ちゃんと話してくれるんだろうな？」

「ええ。もちろん話せない部分はあるけれど、教えられる範囲で話してあげる。私は口は悪いけど嘘は吐かないわ」

自覚はあったのか。

「じゃあ、まず一つ目。昼間の質問から答えるわ」

コトリ、とちゃぶ台の上に湯のみが置かれる。まだ暖かいお茶からは湯気が立ち上っていてユラユラと揺れ、浅海はそれに眼を落としながら口を動かす。

「私は浅海圭。昨日空深くんが見た死体も間違いなく浅海圭、つまり私よ」

「そんなバカな。まさか生き返ったとか非現実的な事を言い出さないよな？」

「そのまさかなのよ。より正確に言えば、私は死んでなかったのだけれど」

「……嘘じゃないんだよな？」

「さっきも言ったけど、私は嘘は吐かないの。そうね……」

顎に手を当てる仕草をすると浅海は視線を宙にさまよわせ、そしてどこからともなく昼間も見たハサミを取り出した。何をするのか、と浅海を注視すると、突然浅海はハサミの刃を自分の手首に当てて躊躇いも無く切り裂いた。

「バカッ、何を……！」
「いいから黙ってみてなさい」
立ち上がり掛けた僕を浅海は落ち着いて制止すると、ボタボタと流れ出る赤い血をただ眺める。僕も言われた通り黙って見ていたが、やがて言葉を失った。
「血が……」
深々と切り裂かれた手首から血が止まり、濡れたそこを拭うと傷の無い、元の綺麗な肌が現れる。唖然としてそこをマジマジを見ていたけど、僕に向かって掛けられた平坦な声に意識を戻される。
「理解したかしら？　こんな体のせいで私は死にもしないし老いることも無い。だから昨日空深くんが見た浅海圭も、今こうして話してる浅海圭も矛盾しないの。ま、空深くんの中の常識にはケンカを売っているでしょうけど」
……信じられないけど信じないといけないんだろうな。浅海の言葉通りこれまでの僕の常識には反するけど、これも事実だ。まさかこんな人間がいるなんて、空想の世界だけだと思ってた。
だけど気になる事が一つ。浅海の言い方だ。口調はもうだいぶ聞き慣れたいつもと同じ調子だけど、どこか自嘲するような、悲しげな響きがあったような気がする。浅海のこの体質が生まれつきのものなのか、それとも後天的な、何かきっかけのような事があったのか聞きたくもあったけど、彼女のこの体の事にこれ以上触れてはいけない様に思えて、僕は口を噤んだ。僕があまり僕の能力について触れて欲しく無いように。

「浅海が元気な理由は納得しておくよ。今こうして目の前に浅海がいるわけだし、仮に今の話が嘘だとしても僕には確かめようが無いわけだしね。
それで、次になんで浅海が僕の家にいるか聞いてもいいか？」
まさか空き巣ってわけでも無いだろうし、何か用事があったからいるんだろうけど、残念ながら僕には相手の心なんて複雑怪奇なものは読めないし、未来だって自分の事は見えないからその用事が何なのかはサッパリだ。
「それは単純な話よ。私が空深くんに話があったから」
「まあそうだろうね。できれば家主の帰りを待って中に入ってくれたら心から歓迎できたけど」
「なんで私が外で立ってなきゃいけないのよ」
「だろうね……で、その話って？」
「私に協力して欲しいの」
「協力？」
協力、ね……いったい僕に何を求めてくるのやら。中途半端な力しか持たない、無力としか思えない僕に何ができるというのか。期待してもらう分には自由だけど、結果は求めないで欲しいんだけどな。
「そもそも私がこの街に来たのは、ある人物を助けるため。そのために空深くんには私を手伝って欲しい」
「手伝うったって僕には何もできないよ。だいたい、人助けなんてだいそれた真似、僕には向いてない。しかもなんで僕なのさ？　もっと他に助けてくれそうな人を探したほうがいい」
「残念ながらそうはいかないの。空深くんは私の秘密を知ってるし、アナタの能力が役立つ時があるかもしれない」
「浅海の秘密がバレる恐れがあるって事は……もしかしなくても危

険だったり？」

そう尋ねると浅海はあっさりと頷いてみせた。

「ハッキリ言うと、命を落すかもしれないわね」

「なら断る。そんな重たい協力なんて僕の手にあまる。別の人に頼んでくれよ」

「さっきも言ったけど、協力を頼める相手は限られてるの。それに……私が助けようとしてる人は空深くん、アナタにも関係ある人なんだけど、それでも他の人に頼めっていうの？」

「……誰だよ、その、浅海が助ける相手って？」

「森川恵」

一瞬、呼吸が止まったような気がした。どうして、そこで森川の名前が出てくる？クラスメートで、目立たず地味で、言葉は悪いけどコレといった取り柄もなさそうな森川の命が危ないんだよ。

「これは空深くんが協力を約束してくれてから話すつもりだったんだけど……森川恵は近々誘拐されるわ」

「なんでだよ？　なんで森川が誘拐されるんだよ？」

「彼女はね、アナタと同じなのよ」

「僕と……？」

「そう。彼女は未来が見えるの。それもアナタと同じか、それ以上にね」

そんなバカな。僕と同じ能力者がそんなにポンポンといるもんか。これまでの十七年間、誰もそんな力を知らず僕を理解してくれる人なんていなかった。なのに身近に……同じクラスになんているはずがない。

「信じられないって顔ね」
「そりゃそうだろう？　僕の力が珍しいことくらい僕だって分かる。なのにそんな近くに同類がいるだなんて信じろって言う方が無茶だ」
「ええ、確かに珍しいし、こんな、同じ学校に二人も見つかるなんて私だって予想外よ。でも、間違いなくそれは事実だわ。私が保証する」
「百歩譲って、森川も未来が見えるとする。でもなんでそれで森川が誘拐されることになる？こんな役に立たない力で……」
「アナタにとっては役に立たなくても、周りから見れば非常に有用な力なの。それくらいはアナタの事だから分かってると思ったけど」
「買い被らないでくれ。こんな無能者の不良の事をどこまで当てにしてるんだよ？」
「……話を続けるわね。もし、未来を見る力を完璧に扱えるなら、未来の情報を狂い無く手に入れられるならそれは野心さえあれば世界を支配することに等しいわ。常に相手の先手を打てる。個人には無理でも、力を持つ組織であれば世界構造を手中に収めるのは難しくない」
「だから協力しろって？　冗談じゃない。そんなの僕ら一般市民からしてみればいわゆる『お上』が変わるだけじゃないか。僕らの、僕の生活が変わるわけじゃないし、権力闘争なら勝手にやってくれよ。僕には関係ない」
何も変わりはしない。せいぜい与党が変わるくらいだ。僕の生活は今まで通り続いて、それは変らない。何か変化があったとしてもそれは所詮規定された変化にすぎない。支配者が変わっても変わらなくても、世界構造が変化してもしなくても起こっただろう差分だ。そんなものに興味は無い。
「私も興味なんて無いわ。権力闘争なんてせいぜい狐と狸が化かし合ってればいいもの。私が言いたいのは、アナタの持つ能力にはそ

れだけの価値を見出す人間がいて、森川恵は誘拐されて人間としての尊厳を奪われる。それを私は止めたいだけよ」

浅海が体を乗り出してちゃぶ台に覆い被さる。俯いた僕の顔を覗き込み、彼女の黒い瞳に僕の歪な姿が写り込んだ。

「そして……それは空深くんも同じじゃなくて？」

「僕は……」

「ずっとアナタは助けられなかった。助けたくてもいつも最後は助けたい相手がスルリと手から滑り落ちていく。そうでしょう？」

「……」

「これはね、空深くん、アナタにとってもチャンスよ」

そう言って浅海はワラウ。いやらしく口端を歪め、その目は全てお見通しだと語ってた。グニャリと歪んだ僕の姿から眼を離したくても離せない。

「誰にも理解されず協力者も無くて失敗してきた。なら協力者がいればどうなるのかしらね？　相手を救えるのならば、空深くんに巣食う無力感も拭えるわ」

誰かを、救えるというのだろうか。そんな傲慢な考えが、僕に許されるというのか。彼女の眼がそれを肯定する。私に従えば大丈夫だと、そう言っているのか。

突然柱に掛けていた古い掛け時計が鳴った。深淵から這い出して見上げると、針は十時を指していた。それを合図としたかのように、浅海は僕の体から離れて元の位置に正座する。

「まあ、すぐに返事をもらえるなんて思ってないから。しばらくその空っぽの頭で悩みなさい」

バカにした口調で、でも顔は普通に笑って浅海はそう言った。
「それじゃ私は寝るから。寝不足は美容の天敵だもの。また後で聞かせてもらうから答えは用意しておいて」
そうは言うけれど、答えを出せるのだろうか、僕は。でも、出さなきゃいけない。森川を助けるか、それとも見捨てるか。言葉にすればその程度で、正しいのは助ける方。でもその選択をするのは難しい。
「……分かったよ。んじゃ、送ってくよ。浅海の家はココから近いのか？」
「近いわよ。動く必要が無いくらいに」
「え？」
「今日からココが私の家だもの」
「……は？」
いや、意味が分からないんだけど。
意味を咀嚼するために固まっている僕の横で浅海はさっさとエプロンを外して、勝手に僕の布団を広げるとその中に潜り込んでいった。
「あの、浅海？　ココは僕の家のはずだけど？」
「そして今日から私の家。ああ、別に名義は変わってないし空深くんもココに住む権利はちゃんと有してるから安心して」
それじゃおやすみなさい、と言いたいことだけ言ってしまうと、浅海はあっさりと寝息を立て始めた。丸メガネの小学五年生もびっくりな速さだ。

「えーっと……」

寄る辺なく周期的に上下する僕が寝るはずだった布団を眺めていたけど、そうしていてもしょうがない。深々とため息をつくと、電気を消して僕も適当に畳の上に寝転がって、体を抱え込む様に丸めて寝ている浅海に背を向ける。まったく、幸せが逃げたからため息が出るのか、ため息が出るから幸せが逃げていくのか。

静かになった室内で、浅海の穏やかな寝息だけが僕の耳に入る。それもまた僕にとっては久々の事だ。そう考えると少しささくれだった畳の寝心地も悪くなく思えてきてしまう。

そんな事を考えながら僕も眼をつむる。そして僕もいつの間にか彼女と同じように寝付いてしまっていた。

―３ｒｄ　普遍、不変―

―３ｒｄ　普遍、不変―

雨が降っていた。ひどい雨だった。分厚い雲がどこまでも遠くに延びていて月明かりを遮断してた。
街灯だけが僕を照らしていた。いや、僕だけじゃない。僕と、モノになり果てた人だったもの。僕らを、冷たい鈍った光が照らす。落ちてくる雨粒に反射して、眩しくて僕は眼を軽くつむった。雨音がとても耳障りだ。それでも雨は僕らを濡らし、水溜まりでパシャパシャと音を立ててくる。
雨音以外に音は無いし人通りも無い。当たり前だ。時間は深夜で、ここは住宅街。こんな時間にこうして雨の中で傘もささずに立っている僕がおかしいんだ。冷え切っていく体を自覚しつつ空を見上げる。目の前の建物の屋上にはグルッと囲むようにフェンスが張り巡らされてて、だけど壊れた一部が外側へはみ出していた。
足元の彼女は雨雲を眺めて眠っていた。美人とは言えない、でも比較的整ったその顔は、初めて会った時は憂いを多分に含んでいたけど、今はとても穏やかだ。
そう、とても穏やかなんだ。眼は閉じて、本当に眠っているように見えるし、悩みや苦しみや哀しみ、それら全てから解放されてしまって彼女はきっと素晴らしい夢を見ているんだろう。

僕の気持ちも知らないで。
僕は彼女の名前も知らない。生まれも育ちも、彼女の事は何も知らない。知っているのは彼女が死のうと考えてたこと。それの実行日が今日だったことだけ。僕は、彼女が秘めて秘めて、誰にも知られてないはずのそれを、偶然にすれ違っただけで知った。
だから僕は彼女を止めた。誰にも死んでほしくなくて、それは見知らぬ行きずりの人だろうが変らない。僕に助けられるのなら、僕の手で救えるのなら生きていて欲しかった。父さんと母さんみたいに、助けられる可能性を見逃して死なせてしまう様なことは、絶対にしたくなかった。
彼女を思いとどまらせるために何を話したのかは、正直覚えていない。ただ必死だったのは覚えてる。誰もいない静かな屋上で、必死で言葉をつむぎ、年上の彼女に幼い僕の考えを伝えた。まだ中学生の、罪とも言える無知と無垢さを以て訴えた言葉。だけど彼女はそれを受け入れてくれた。生きることを約束してくれた。
その結果がこれか。眼を開けない彼女の顔を見て自分を吐き捨てる。唾棄した自分に引きずられて膝から力が抜ける。いつの間にか口からは嗚咽が漏れていて、なのにそれが自分のものじゃないかのように遠くに聞こえる。
僕には、何も出来ない。何をしても結果は変らない。なら、未来が見えることに何の意味があるというのだろう。
ノイズが混じる。映像が乱れる。壊れたテレビみたいにザーザーと音がうるさい。だってそれはそうだ。こんなにも雨が降っている。
ザアザアと、バシャバシャと――

――ジリリリリリリリ……
唐突に視界が開けた。仰向けの顔が見ている天井は当然知っている天井であって、眼が覚めるとそこはどこか違う場所だなんて事は無

い。いつだって眼が覚めれば、そこにあるのは現実だ。
大きく肺から息を吐き出して一息つく。ひどい夢だ。もうずっと見てなかったというのに、どうして今になってみるというのか。まったく、朝からひどい気分だ。寝起きの悪い僕がスパッと目が覚めたのは良い事かもしれないけど。
けたたましく鳴り続ける目覚ましを止めるために姿勢を入れ替えようと体をひねる。すると、何とも形容しがたい、慣れない感触が肘に伝わってきた。言葉で表現するならそう、「ムニュ」っと――

「へ？」

おかしな感触の発生源を求めて顔をゆっくりと動かしてみる。ギギギ、と何だか錆びついた機械じみた音もしてる気がするが。

「すぅー……」
「なななななな！？」

何で浅海が僕の隣で寝てる！？しかも僕の腕を自分の胸に抱きしめて！？
確かに夕べ寝た時は浅海とは距離を置いて横になったはず。浅海に布団を占領されてたから僕は布団の隣で寝たはずだ。こんな真が喜びそうな状態になるような距離じゃなかったはず。寝起きでイマイチ回らない頭がフル稼働しながら自分の場所を確認すると、僕は確かに布団からは距離を取っていて、それはつまりは浅海の方から寄ってきたわけで。
僕の声の所為か、浅海のまぶたがゆっくり持ち上がる。焦点が定まってないのか、何回か瞬きをして左手で眼を擦ると今の状態に気がついたのか、僕の眼からも浅海が驚いたのが分かった。
けれどもそれも一瞬の事で、すぐに表情を取り繕うと、浅海はニヤリという擬音が適切な程に唇を歪めた。

「寝てても人を抱き寄せるなんて、空深くんはよっぽど不満が溜まってるのね。まったく、とんだド変態だこと」
「いや、腕を抱きしめてるのは浅海の方ではあるんだけど」
「あらあら、女の子の所為にするなんて男らしくない。いっその事切り落としてしまえばいいのに。どうせ使うこと無いんだから」

朝から全開なことで。なんというか、昨日の暴言を吐き続ける浅海の記憶も蘇ってきて、今しがた浅海の姿に驚いて損した気分になった僕は決して悪く無いと思う。未だ胸に抱かれたままの腕をそっと引き抜くと、浅海は名残惜しそうな、残念そうな顔を浮かべた。そんな顔をするならもうちょっと男をその気にさせる言葉を口にして欲しい。そんな考えは僕は口にしないけれど。
ともかくも今日も平日な朝なわけで、いつまでも浅海とこうして寝たまま顔を突き合わせて暴言を聞き流し続けてる時間は無い。起き上がって髪をかきむしり、シャワーを浴びようと立ち上がったところで手を掴まれた。ホント、その細い体のどこにそんな力があるんだよって言いたいくらいの力で引っ張られて座らされる。

「先にシャワー使うわね。空深くんは先に他の準備でもしてて」

寝る前と同じく一方的にそれだけ告げると、さっさと自分は風呂場に入っていってしまった。歩きながら着ていた制服を脱ぐなんて器用な事をしながら。

「勝手だなぁ……」

ため息をつきながらも浅海の制服を集めるとシワになってないか確認する。すると少しだけ深いシワがあったから、窓際に置いてあったアイロンとアイロン台を持ってきて、その時にテレビのスイッチ

も入れる。テレビのニュースをＢＧＭにしながら簡単にアイロンをかける。
適当にアイロンをかけ終えて、流しを洗面台代わりにしようと思ったら夕べの皿がタライに浸かりっぱなし。それを見るとついついため息が出る。テレビに表示されてる時刻を見れば、まだ余裕がある。朝からメンドクサイけど、仕方ない。どうせ五分もあれば終わることだし、と寝起きの格好のままスポンジを手に取った。

「それでは最新のニュースをお伝えします。
ＩＨＦＬ――国際生命科学研究所日本支社の石村光一社長は昨日会見を開き、癌に対する新たな新薬の開発に成功したと発表しました。会見で石村社長は、この新薬は従来よりも副作用がほぼ無く、服用してもこれまでと同じように生活を送る事が可能で、およそ一ヶ月ほど服用を続けることで体内の癌細胞を完全に消滅すると述べました。また石村社長は『この新薬により、人類を長年苦しめてきた癌という病を完全に克服し、新たな未来を手に入れた』と述べ、大塚厚生労働大臣も『素晴らしい開発だ。世界中がこの新薬を祝福している』と……」

ニュースを聞き流し、一通り食器を片付けて歯を磨く。その間に袋からパンを取り出してトースターに突っ込む。朝の準備を一通り終えて、コーヒーを飲みながらいつも通りボーっとして登校までの時間を過ごす。

「あら、朝ご飯の準備してくれたのね」

声に振り向くと下着だけ着けた浅海がバスタオルを肩にかけて立っていた。制服の上からだとそこまで感じなかったけど意外と浅海は細かった。スラリとした足は少し汗ばんでいて、扇情的というのだろうか。腰のところもくびれてるし、肌も白いしとてもキレイだと

思う。

「ジロジロ見てるのは、まあ私が魅力的だから許してあげるけど何か言うことは無いのかしら？」

「ん？　ああ、そっか。キレイだね」

「……感情がこもってないわ。三点ね」

「何点満点で？」

「千点満点」

ああそうかい。まあ所詮お世辞だし、どうでもいいんだけど。

「空深くんってどうにも反応が淡白な事が多いわね。ツッコミは別だけど。まさか――」

「淡白なのは認めるけど体はどこもかしこも至って正常。それと朝から下ネタは禁止」

「つまんない男ね」

「そいつはどうも。それよりも、さっさと着替えて飯を食う。時間が無くなる」

折り畳んでおいた制服を指さすと、浅海はありがとう、と礼を述べてブラウスとスカートを手に取った。なんだ、コイツもお礼は言えるのか。

「アナタの考えてる事が手に取るように分かるわ。私だって感謝の言葉くらい知ってるわよ。バカにしないで欲しいわね」

「よく僕の考えてる事が分かるな。浅海は読心術でも身に付けてるのか？　それとも僕みたいに未来が見えるのか、実は？」

「人生経験の差よ。自慢できることじゃないわ。未来なんてとっくの昔に見えなくなったし」

「え？」

最後の言葉に僕は浅海の顔を見た。伏せ気味の顔には長い髪が垂れてきていて彼女の顔を隠していた。その隙間からうかがい知れた、ほんの少しだけ覗いた彼女の眼は、どこか泣きそうな色をたたえていた。

「さて、それじゃせっかく準備してくれたんだし、いただきます」

その顔の訳を聞こうとして、浅海の声に遮られる。それがなんとなく拒絶されているような気がして言葉にできず、だから僕も浅海と同じように手を合わせてトーストにかじりついた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

僕と浅海はクラスメートだ。たった二日前に浅海が転校してきて、まあ彼女は学校ではこの二日間、猫を三味線を作れそうなほどに何枚も被っているみたいだから当然評判は良い。髪は薄く茶色に染められてはいるけど、和服が似合いそうな落ち着いた雰囲気だし、お淑やか（に見せかけている）で誰にでも丁寧に接してるらしいから男女問わず人気が出てきている。

そうなれば男女関係に関心の高い思春期の我らの注目を浴びるわけで、恐らくは彼女一人で登校していても十分に周囲の眼を引きつけているに違いないと僕は思う。

なら、その隣に男の姿があったならどうなるか？答えは火を点けたら煙が出るのと同じように明らかであって、更にはその男が学校では敬遠されている僕みたいな人間だったら、それこそ老若男女問わ

ず注意を集めてしまうわけで。

「……」

なもので僕はその注目を校内で絶賛大収集中である。隣の浅海は呑気に鼻歌を歌いながら、周りの注目などどこ吹く風、と言った感じに歩いている。たいがい僕も周囲の視線には図太いと思ってたけど、彼女の図太さにはさすがに感心するな。

「周りの有象無象の事をどうして気にかける必要があるの？」

「道端に並んでる銅像がみんな自分の方を見てたら気になるだろ？」

「ふぅん、まあそうかもね」

まったく以て度し難い。どうしてみんなそこまで周囲に関心を払えるんだろうか。疲れないんだろうか、とつくづく思う。周りと関わって、全く良い事が無いとは言わないけど、僕からしてみればデメリットが多い。柵は増え、気は遣わないといけないし、無意識下で相手に対して期待を掛け、掛けられる。

付き合いなんて最低限度、数人腹を割って話せる相手がいればそれでいいじゃないか。このご時世、周囲と深く関わらないと生きていけないなんて事は無いんだから。みんな僕と違って十分に助けてくれる人はいるだろうに。

「よ～る～……」

と、後ろから恨めしげな声が聞こえてきて、その声こそまあ僕の数少ない友人に数えられる相手のものであることは、残念ながら声を聞くだけで分かってしまった。

「おはよう、真」

「おはよう、じゃねえよ！　何だっていきなり転校生とうらやましい展開になってんだよ！？　昨日お前が俺に言ったのは嘘だったのか！？」
「……何か言ったっけ？」
「くぁーっ！　どの口がンな事いうかなぁ！？　昨日隣の転校生とは何にも無かったって言ったじゃねえか！！」
確かに浅海とは別に何も無かったけど、真にそんな事を言った覚えは無い。無言のまま真を沈めたはずだから。
「別に何も無いよ。一緒にガッコに来ただけじゃん？」
「あ～や～し～い～な～」
「あ～や～し～い～ね～」
「なんで三上先生まで乗っかってくるんですか……」
そもそもいつの間に現れたんだ、あかりちゃんは。
そんな僕の疑問をよそに、あかりちゃんはちっちゃな胸を張って、外向けの笑顔から浅海そっくりなニヤリ笑いを浮かべてくる。
「いや～青春してるよね。恋愛するのはいい事だよ！　さすがに夜クンがここまで手が早いとは思わなかったけど。あ、夜クンの事だから大丈夫だと思うけど、浅海さんは、もし夜クンが無理やり高校生にあるまじき事をしてきたらコッソリ教えてね。首を絞め落とすから」
信頼されてるのかそうじゃないのか。判断に迷うところだけど、話のそもそもの前提が違う。
「だから……」
「あ、あの……」

「ん？」
掛けられた声に振り向けば森川の姿。真と浅海も一緒に振り向いた所為か、森川はビクッと首を竦ませて、オドオドしながらも尋ねてきた。
「そ、その……空深くんと、あ、浅海さんは付き合ってるの？」
……森川、お前もか。
思わず英国のかの作家で有名になったセリフを吐きつつガックシと脱力してしまうのを何とか堪えつつも、そこははっきりさせておかないとまずいだろう。
「僕と浅海はそういう関係じゃないから」
「……本当に？　手を繋いだりとかもしてないの？」
「してないしてない」
「き、キスとかも……」
「舌とか噛み切られそうだな」
いったい森川の中で僕と浅海の関係はどういう関係に昇華させられているのだろうか。ともかくも僕の言葉の何かに安心したのか、森川はホッと胸をなで下ろした。まあ、なんにせよ、誤解が解けた様で何よりだと思う。
「ま、そうね。私と空深くんは皆さんが期待している様な関係じゃないですから」
……なんだろうか。まだ浅海と出会って三日目なんだけど、こうも素直に僕の期待通りのセリフを吐いてくれるとどうも逆に不安になる。

あかりちゃんも真も僕と浅海が揃って否定したからか、矛先を納めたけどどこか不満そうだ。特に真。お前は僕が浅海と付き合ってた方が良いのかそうじゃないのかどっちなんだよ。
ともかくも教室へ、と珍しい五人で廊下を歩き出したところで浅海が口を開いた。

「空深くんとは一緒に住んでるだけですから」

頼むから勘弁してくれ。
そんな僕の願いが通じたのか、幸いにして前を歩くあかりちゃんと真には聞こえなかったらしく二人は会話しながら人がごった返す廊下を進んでいた。隣で浅海が盛大に舌打ちをしていたけどそれは無視しておく。
だけど森川には聞こえてたみたいで、ものすごい衝撃を受けたような顔をしていた。それはもう形容するのが僕のチープな感性では一生かかっても困難なくらいに。森川もアレだな、気づかなかったけど表情が豊かだな。羨ましい。
立ち止まったままの森川を放置していくのも問題だから現実復帰させようと声を掛けようとしたところで、突然森川がにやけ出した。

「……どうしたのか、森川？　すごい不気味なんだけど……」

衝撃で頭がおかしくなったわけではないと信じたい。そもそも、そんなに衝撃を受けることなのかは残念ながら僕には理解できないが。

「えっ！？　う、ううん、何でもない」
「そう言う割りにはずいぶんと……嬉しそうだけど？」
「うーん……そうかもしれない」

今までのやり取りのどこに森川が嬉しくなる要素があったのか。ま

あ人の心なんてちょっとした事で上がりも下がりもするものだから、そんなモンだと思っておこう。
ニッコリと黒縁メガネの奥の眼を三日月型にして、どことなく弾む足取りで森川は前を歩く。
軽くため息を吐く。何だか朝から疲れた。教室の入口に刺さる二ー七の室名札が見えてきた時、浅海が体をそっと体を寄せてきた。そして僕の耳元で甘く囁く様にして告げた。

「……今日の放課後、森川さんの家に行くわよ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ここなら大丈夫そうね」

そう言って浅海は手に持っていた携帯用の椅子を広げた。そしてそれをきしませながらドカッと座ると、双眼鏡を取り出して覗き込んだ。椅子といい双眼鏡といいどこから持ってきたのか。相変わらず浅海は謎だ。

「それで、どれが森川の家なんだ？」
「あれよ。あの青い屋根の白い家」

マンションの屋上の外壁から少しだけ身を乗り出して浅海が指さしてる方向を見ると、そこには似たような住宅が立ち並ぶ団地が広がっていた。どの家も四角四面に同じ作りで個性も何も無いつまらない家だ。それが悪いとは言わないけど、もう少し区別してもいいんじゃないだろうか。

「どれだよ？」

「だからあれよ。ちょっと屋根が色あせてる家があるでしょ？」

言われて注視してみる。なるほど、確かによくよく見れば、ちょっとだけ、ホントに微妙に色が周りと違う家が一軒ある。あるけど、あれを一発で見つけるのは無理だろ。

「よく分かったな。言われないと絶対分かんない」

「詳細な事前調査の結果よ。毎日見てれば分かるわよ」

あっさりとそう言いいながら、浅海はじっと森川の家を見ている。いったいいつから準備を始めていたのか気になるところだけど、それよりも気になることがある。

「ホントに森川が……誘拐されるのか？　イマイチ信じられないんだけど」

「それは絶対よ。間違いないわ。断言してあげるから、そこは疑う必要ないわよ」

そこまで言うのなら本当に森川は誘拐されてしまうのだろう。僕にはそんな未来は見えなかったけど、それこそ浅海は未来を見てきたかの様に言う。

「どうやってそれを知ったんだ？　別に疑ってるわけじゃないけど、良かったら教えて欲しいんだけど」
「そうね……」
何気なく聞いただけなんだけど、浅海は双眼鏡から眼を離すと空を仰ぐようにしてじっと考えこむ。眼を閉じて、そしてまた開くと再び双眼鏡を覗き込みながら、今度は浅海の方から尋ねてきた。
「空深くんが私たちに協力してくれると約束してくれること、そして聞いた内容を一切他言しないこと。それを守ってくれるなら、全部じゃないけど教えてあげてもいいわ」
「私たち？　浅海だけじゃないのか……って、それもまだ教えてはもらえないか」
うなずく浅海。確かに、まだ完全に味方になってくれるかどうか分からない相手にアレコレと教えてくれるはずは無いか。具体的にどこまで話が広がっているのか、危険がつきまとうと夕べ浅海は言ってたけど、それもどこまで危険度が高いのか。例えば、ちょっと油断しただけで命の危険にさらされる程なのか、それとも運が悪かったら命を落としてしまう程度なのか。
そこまで考えて、つい口元に笑みが浮かんでしまった。
そもそも、僕に何かやりたいことがあるわけじゃない。何となくこれまで両親が死んでから生きてきたけど、それこそ何となくで、絶対に死にたくない理由は無い。人の未来は見えても、自分の未来は見えないのだから。
未来を見えることなんて面白くないじゃないか、と普通の人は言うだろう。きっと、それは事実なんだろう。だけども、僕に話を限ればそれは当てはまらない。未来が見えることは生きている証なんだ。未来が見えるなら、少なくとも僕が見た未来の時点まで彼らは将来があるんだ。なのに、僕にはそれが無い。彼らの様に僕の未来が見

えない。
その事に気づく度、僕は僕自身によって僕を否定されている様な気分になる。お前には何も無い、何もできない、ただいるだけなんだ、と。生きているのか死んでいるのか分からない、誰にも影響を及ぼすことのできない存在なんだ、と。
なのにまだこうしてのうのうと生きている理由はなんなのだろう。たぶん、僕はまだ諦めてないんだ。誰かを救えることを。
浅海が言ったとおり、僕は僕が価値ある人間だと証明したいんだ。僕には力があると信じたいんだ。無力なんかじゃない、まだ生きていていいんだと思いたいんだ。だからこうして浅海と一緒にいる。荒唐無稽な話を、その実、疑いもせずに信じてるんだ。彼女といれば、僕が僕を信じれるチャンスを与えてくれると分かったから。
ならば、僕の危険度合いなんてどうでもいい話だ。幸いにして、僕はまだ森川の未来は見えてない。だから、今まで見てきた僕の未来たちとは違って頑張り次第で未来がどうとでも変わるかもしれない。それは僕が見てきた未来を変えるという、不毛でしかない行為よりよっぽど有意義だろう。

「……協力するよ。こんな人間に何が出来るか分からないけど、誰かを僕が協力することで助けられるなら手を貸させて欲しい。モチロン口外もしない。口外した時は……そうだね、浅海が僕を殺せばいい」

だから、誰かを救わせて下さい。僕の力が、存在が意味あるものだと信じられるように。

「……そんなこと、言われなくてもそうするわ。私が危険に陥った時に真っ先に盾にしてあげるから覚悟しておくことね」

ちょっとだけ間を置いて浅海は答えてくれた。顔の向きは下に広が

る住宅街に向けたまま。横顔も長い髪に隠れて僕からは見えなかった。

「それで、なぜ私が森川さんが誘拐されるって知ってるかだけど、彼女の未来を見たからよ」

「それは……僕みたいな能力者が森川以外にもいるって判断していいの？」

「んー……そうね、そう言ってもいいわ。だから彼女が誘拐に合うのは既定事項と言える。でもただ一つ問題があるの」

「問題？」

「ええ。彼女がいつ誘拐されるか。それがはっきりしないのよ」

ちょっと待ってくれ。それじゃいつ起こるか分からない誘拐の現場を押さえるために毎日ずっと森川を見張ってろって事か？

「一応ある程度期間は絞れてはいるわ。今日からおよそ二週間以内に、彼女は自宅から誘拐される」

「結構幅があるな。もうちょっと絞れなかったの？」

「仕方ないわ。その様子を見たのもずいぶん前で、記憶がはっきりしてないもの」

しかし、ずいぶんと未来の事まで見えるんだな。それだけ先の事が分かれば、準備も十分できそうだ。そう考えると、一日二日先しか分からない僕よりかはよっぽど役に立つな。

「まあでも、自宅って分かってるならまだやりやすいのか。どこで攫われるかも分かんないんじゃ、それこそ森川をストーカーするしかなくなるしな」

「あら、空深くんてそういう趣味もあったのね。やっぱりモテナイ男は違うわね。お願いだから一度捕まって性格を改造してきてくれ

ないかしら？　なんならモイデきてもらってもいいんだけど」
何を、とは敢えて聞くまい。浅海の方こそ口の悪さを矯正してくれると、きっと世の中が上手く回ってくれるだろうな。主に僕の周囲の世界が。

「僕の事はどうでもいいから。そんなことより森川はまだ帰ってこないのか？」
「ちょっと待って……いたわ。一人でまっすぐ家に向かってるみたいね。つまんない子。少しくらい寄り道するとか男連れてくるとかないのかしら？」

それだと困るのはコッチなんだけどな。監視するならあんまり対象が動かないほうがいいだろうに。

「そんなの分かってるわよ。それでもどうせ見てるだけなら何か面白いイベントがあった方がいいじゃない」
「世の中そうそう面白い事なんて起きないもんだよ。起きるのは大概笑えないイベントだし」
「まったく、そんなに悲観的で生きてて楽しいのか聞いてみてもいいかしら？」
「僕を見てれば分かるだろ？　悲観的に生きる方が楽なんだよ」
「それには同意するわね。それでもペシミスティックな考えだけじゃ生きていけないものよ？　覚えておくことをオススメするわ。
……っと、家の方からも誰か出てきたわ」

そう言って浅海は意識を双眼鏡の奥に戻した。
そうなると双眼鏡も望遠鏡も持っていない僕はまた暇になるわけで、完全に今日は浅海の付き添いの範囲を抜けない。
椅子も無いから冷たいコンクリートの床に腰を下ろして、ぼんやり

と空と浅海の横顔を行ったり来たりする作業をするしかない。
空は夕暮れ。何も無いといいけれど、何か起こるとしたらこの時間帯だろうと思わせる微妙な時間帯。壁にもたれかかりながら森川の事を考えてみた。
僕にとって森川は数あるクラスメートの一人でしか無い。ずいぶんと昔に流行ったような太い黒縁のメガネを掛けて、いつもいるかいないか分からないように教室のスミで静かにしてるイメージが強い。ここ数日で少しイメージが変わりつつあるけど、大人しくて目立たないことには変りはない。
そんな森川が僕と同じ力を持っているとは思っていなくて、浅海に言わせればその力は世界を支配できる可能性を持ってるなんて、ずいぶんとスケールが大きな話だと思う。だけど僕に言わせればそんなもの役に立たない。見てしまった時点で未来は固定される。信じたくないけど、それがこれまでの人生で気づきあげた僕の経験則だ。そんなものをどっかのエライ人たちが欲しがってるなんて馬鹿げた話だ。もっと他にやることなんてあるだろうに。
それでも。それでも彼女は必要とされている。世界に影響を及ぼす可能性を持つ人物として。
森川恵。浅海は彼女を止めようとしてるけど、それは森川自身にとってどうなのだろう。止めずにどこかの組織なり政府なりに雇われる方が、彼女が幸せを感じられる。もしそうなら、僕がやろうとしてることは彼女を救けることじゃなくて、彼女を貶める事に繋がりはしないだろうか。
そんな考えが浮かんだ瞬間、胸の奥が疼く。その思考をすること自体を戒めるように。

「どうやら単なる来客みたいね。家族も見送ってるみたいだし、関係は無さそう、か……」
「見張り始めた初日になにか起こるなんて事はないだろうさ。こういうのは気長に待つのがいいよ。そういや、時間とかも分かんない

の？」
「正確な時間は分からないわ。でも……確か夕方から夜に掛けてだったと思う」
思い出すように顎に手を当てて浅海は言った。
空はまだ青い。夕方も浅くて、仮に今日何かが起こるとしたらまだ少し先の事だろう。
「そっか。それで森川はまだ道を歩いてるの？」
「ちょっと待ちなさい……」
双眼鏡を眼につけたまま、浅海は右へ左へと顔を動かす。けれど、どうにも様子がおかしい。焦った風に何度も道路と家の間を視線が行き来して、苛立たしげな舌打ちが聞こえた。
「……いないわ」
「は？」
ちょっと待ってくれ。いきなり初日に誘拐されるのは、可能性としてあり得る。でもさっきの浅海の話が本当なら、まだ誘拐されるのは先のはずだ。
「どういうことだよ！？　まさかもうさらわれたって言うのかよ！？」
「そんな事分かんないわよ！　こんな出来事なんて、私は知らない……！」
「誰かが見たっていう未来には無かったって事か！？」
まさか、そんな事は有り得ない。未来なんて固定のはずだ。未来を見てしまった以上、その未来が外れる事なんて無い。それは時間も、

場所も、状況も全てが合致する。浅海が記憶違いをしてなければ、まだ森川が誘拐される時間じゃない。だから……そんなはずはないんだ。

「そんなの信じられないわ！　未来なんてちょっとした変化で簡単に変わるものよ！　もし、私が来たことでタイミングが変わったとしたら……」

感情を抑えるように下唇を噛んで浅海は僕を否定する。それを僕は心の中でだけ否定する。そんなはずはない、そんなはずはないんだ……

浅海は屋上から探すのを諦めたのか、双眼鏡を僕へと投げ渡した。そして屋上の出入り口へと走りだした。

「どこ行くんだよ！？」

「この辺りを探してくるわ！　空深くんはここから森川さんを探してて！」

彼女らしく、ここ二、三日で慣れた一方的な物言いを残して浅海は消えた。僕は屋上に一人残されて、夕暮れの風が頬を撫でる。

僕は渡された双眼鏡を見下ろし、ため息をつきながら一人寂しくレンズ越しの街を見下ろした。丁寧に整頓された街が歪んで、歪な形に変わる。覗き込んだはずの街から覗き込まれ、いつしか僕は見下ろされていた。いつもの学校の屋上と同じように。

「……やっぱり居た」

けれどそれも一瞬だけだった。聞き覚えのある声に振り向けば、そこには彼女がいた。

「え？　森川？」

どうして彼女がここにいるのか。混乱半ばの僕に向かって森川は恥ずかしそうに笑いかけると、コッチに向かって歩いてくる。

「ここで何してるの？」

学校指定のカバンを後ろ手に持って、何が嬉しいのか弾むような足取りだ。その様子は、普段学校で見てるのとは違って、どこか森川らしくない。いつもうつむきがちで、人と話すのが苦手そうなのに、どうも僕と話す時はそんな事はないらしい。

「何って……別に何もしてないよ。ただこっから街を見てただけ」

嘘は言ってない。嘘はなるべく言いたくない。浅海は何も言わなかったけれど、こうやってこっそりと森川の様子を伺ってるって事は、きっと森川に監視してるのを悟られてはいけないんだろう。理由は分からないけれど、ともかくはごまかすしか無い。まさか森川も自分を監視してるなんて想像してないはずだ。

「ふふ、当ててあげようか？　私を見てたんでしょ？」

だけどもそんな予想も覆された。「どう？　当りでしょ？」と得意気に胸を張る森川に、僕は何と返せば良いのか分からず、だから僕も「さあ、どうだろう？」と意味も無く嘯いてみた。もっとも、森川はそんな僕の言葉なんて聞いてないみたいで。

「イケないんだよ？　女の子を隠れて見てるなんて。あ、もしかして……その、空深くんってストー……」

「断じて違う」

言いがかりも甚だしい。僕には女の子をつけ回す趣味なんて一切ない事は、僕のすでに地に落ちてる名誉のためにも声高に断言しておきたい。とは言え、やってることは否定できないのが辛いところだけど。
あと、どうして森川はそこで残念そうにしてるんだ。

「じゃあどうして私を見てたの？」
「それは……」

森川が僕の顔を覗き込む。僕は言い淀んで、後ろめたいからだろうか、つい顔を逸らしてしまう。
僕は残念ながら弁が立つ方では無いし、アドリブにはめっぽう弱いと自覚してる。一向に妙案が浮かんでこない怠け者の頭を恨みつつも考えを巡らせるが、当然のように何も良い言い訳なんぞ浮かんでは来ない。

「いいよ、別に。言いたくないなら」
「えっ？　いいのか？」
「うん。空深くんなら、私を見てたのもきっと何かちゃんとした理由があるんだろうし、言えない理由もあるんだと思うから。でも、その……お願いがあるんだけど……」

この際だ。深く追求せずにいてくれるんなら多少の難題でも聞こう。あくまで僕の出来る範囲でしか無くて、だからものすごい狭い範囲のことしかできないのだけれど、森川のことだ、そう無理難題は言ってこないだろう。浅海ならとんでもないことを言い出しそうだけど。一生私の奴隷になりなさい、とか。

「僕でできることなら大丈夫だけど……」

「うん、えっとね……」

いつも学校で見る森川と同じように、モジモジと恥ずかしそうにして言葉を区切る。チラチラと僕の表情を伺いながらも、だけど森川は耳を疑う様な事を言い出した。

「その……私とデートしてください」

―4th You Are Not Me―（前書き）

一言でも感想頂けたら嬉しいです。

―4th You Are Not Me―

空は憎らしいほどに晴れ。夏の到来を告げる太陽は燦々と僕に向かって降り注いでいて、それでいてまだ夏の到来には程遠いとばかりに風は涼やかだ。日本の代名詞の一つとも言える梅雨の到来もまだで、だけども直射で日光が当たるといつの間にか日焼けしてしまいそうなほどに紫外線は強い。

「シミができちゃったらどうしよう……」

近くで誰も僕に注目していない事を良い事に一人寂しくボケをかましてみるけど、今もっとも突っ込んでくれそうな浅海はそばにいない。なぜなら僕は待ち合わせをしているからで、その相手は喜ばしいことに毒を吐きまくる浅海では無い。

「人ばっか……」

駅を出て、どこにいたんだよ、とぼやきながら人が溢れている街中を歩く。人ごみは苦手で、いるだけで気分が悪くなるけど、それを抜けると海が近いせいか、潮の香りが漂ってくる。淡水と海水が入り交じる河口の近くを進んでいくと、大きな観覧車が見えてきた。更に近づくとジェットコースターから甲高い悲鳴が断続的に響いてくる。

「しっかし、遊園地でデートねぇ……」

遊園地自体久々で、デートなんて正直初めてだ。僕なんかとデート

なんて物好きだな、なんて考えながら待ち合わせ場所に向かう。
待ち合わせ場所は遊園地の入り口。中と違って入口近くには人はそんなに多くなくて、だから本日僕とデートしてくれるという奇特な人物もすぐに見つかった。

「森川ぁー！」

名前を呼んでみるけど、呼ばれた本人からの反応は無くて、ボーっとして正面より少し上を見てる。何があるんだろう、と思って視線の先を追いかけてみるけど、そこには別段何も珍しいものは無くて、つまらないビル群があるだけ。

「森川」

近寄ってもう一度声を掛けてみるけどやっぱり無反応。もしかして人違い？とか思って失礼ながら森川（らしき人）の顔をマジマジと見させてもらうけど、どう見ても森川にしか見えない。表情以外は。この上なくとんでもなく最上な幸せを見つけたみたいに顔はにやけてだらしなく口を開け、マンガとかアニメとかだと森川のところだけ光が差し込んでキラキラと頭の周りに天使が回っている感じだろうか。まったく何を想像してそんな表情をしてるのか知らんけど。そのまんまアヘアヘと妄想に浸ってるだろう森川を観察し続けるのも、帰り道を監視するのと違って面白そうではあるのだけど、一向に話が進まなそうなので肩を叩いて森川を正気に戻す。

「えっ！　はっ、そそそ空深くん！？」
「まあそうだけど」

僕に見えないのなら眼科に行くことをオススメしよう。

「……いつから見てた？」
「五分くらい前から」
そう言うと森川は顔を、それこそ湯気が出そうなくらいに真っ赤にして俯いた。そしてガックシと両手を地について項垂れた。
予想以上の落ち込み具合だ。そんなに見られて恥ずかしいものだったのだろうか。ともかく、こうして地面に向かって挨拶し続けてる森川に対して何て声を掛けていいか分からないけど、何となく言葉が浮かんでみたから掛けてみることにする。
「……笑えば良いと思うよ？」
「笑えないよっ！！」
予想以上にいいツッコミが返ってきた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

さてさて、何とか立ち直った森川と一緒にリクエスト通りに遊園地に入ったわけだけど、早々に乗り物に乗るのは諦めた。それは何故かと言えば偏に森川の三半規管に多大な問題があったわけで、森川がせがんだから乗ったジェットコースターに速攻でノックアウトされたわけで。
なもんだから乗り物に乗るのは止めて、森川は今は日陰になってる

ベンチで休んでる。僕はと言えば、売店で売ってた冷たいジュースを持って森川の元に歩いてた。

「森川」

名前を呼ぶと横になってた森川が体を起こして、濡らして顔に掛けていたハンカチを取る。メガネを外してるからだろうか、眼を細めて僕の姿を確認すると訝しげに尋ねた。

「……空深くん？」

「そうだよ。ハイ、オレンジジュースで良い？」

「あ、うん。ありがとう」

森川にジュースを渡して隣に座る。両手でカップを持って森川はチビリチビリと飲んでいく。顔色はまだ少し悪いけど、その顔は少し嬉しそうだ。それが何となく嬉しくて森川の顔を見てると、ふと気づいた。

「ふぅん……森川も泣きボクロがあるんだ」

普段はメガネに隠れてるのか気づかなかったけれど、左目の下に小さく可愛らしくホクロがあった。森川は指でホクロに触れると、恥ずかしそうにはにかんだ。

「そう言えば浅海さんにもあったね」

「よく分かったね。浅海の事を言ってるって」

「たまたまだよ。浅海さんが転校してきた日に、『キレイな人だな』って思って見とれてたら気づいたの。私と一緒だなって。あ、私なんかと比べられたら浅海さんもイヤだよね？」

「そんな事ないと思うけどね」

口では否定しつつも否定しきれないのがツライとこだな。さすがに森川には面と向かって言わないだろうけど、どうも浅海は森川を嫌ってるフシがある。
以前と比べて森川と接する機会が増えてきたけど、僕の近くには何故か浅海がいるから自然と浅海と森川が顔を合わせる事も多くなる。登校時間が重なる所為か、森川と廊下で毎朝一緒になって挨拶を交わすのだけど、浅海の森川に対する挨拶が心無しぞんざいに感じられる。
それに、この前、浅海が森川を見失った日もそうだった。
森川とデートの約束をして、森川が屋上から姿を消したのと入れ違いに浅海は戻ってきた。たぶん階段を駆け上がってきたんだろう、息を切らせながら携帯を片手に落ち込んでいた。顔を真っ青にして、まるでこの世の終わりがやってきたみたいな表情をしてるから僕が、森川がココにやってきた事を告げると、浅海は力が抜けたように大きく息を吐いた。
そして何故か僕が蹴られた。

「気にしないで。ただの八つ当たりよ」

蹴られた僕としては溜まったもんじゃないけど、怒りに満ち満ちて閻魔様でさえ尻尾を巻いて逃げそうな、とても形容できない、女性としては残念すぎる顔を見て抗議の声を引っ込めた。誰だって自分の命は大切だ。

「……ったく、あのバカ女は……」

浅海は言い捨てた。そうは言いつつも実はホッとしてるんだろ、なんて思いながら顔を見たけど、その予想は外れていた。心底苛立ったように森川の家を睨みつけて、盛んに舌打ちを続ける。

今の浅海にデートの事を伝えたらどんな反応をするだろうか、と半ば自殺願望じみた好奇心に駆られて伝えてみる。そして案の定蹴られた。股間を。

「ふんっ！　まあいいわ。あの女とデートでも何でも勝手にしなさい。その代わり、有事の際には空深くんが彼女を守るのよ」

「……事は森川の家の前で起こるんじゃなかったのか？」

「ええ、私もそう思ってたわ。でも今日の事で私が知ってる未来通りに事が起こるとは限らないって分かったもの」

痛みに堪えて疑問をすると浅海からはそんな答えが返ってきた。それは僕にしてみれば到底受け入れられない返答だったけど、僕だってただの経験則に過ぎなくて、だから明確な反論を持ち得ない。ともかく僕が分かったのは、それ以来森川の話題が出ると浅海が不機嫌そうに鼻を鳴らすことだけ。

「ううん、私、たぶん浅海さんに嫌われてるから……」

隣でそう漏らした森川の声に僕の意識は今に戻される。森川を見れば、彼女は残念そうに笑った。

「浅海さんはいい人だから隠してるけど、女の子ってそういうのに敏感なの。だからすぐに分かるんだよ」

浅海さんと仲良くなりたいんだけどな、とつぶやくと森川は脇に置いてあったメガネを掛ける。泣きボクロはもう見えなくなった。

「ゴメンね。無理言ってせっかく空深くんが付き合ってくれてるのに、つまんない話しちゃって。乗り物にもほとんど乗れてないのに

ね」
「たぶんだけど、浅海は森川を完全に嫌っちゃいないよ」
もし浅海が森川を嫌いなら、あそこまで慌てて森川を探したりはしないはず。どうして嫌っているかのような態度を取るのか、そこまでは分からないけど、彼女のアンバランスな言動がそれを物語ってる。もっとも、その理由を尋ねてもきっと浅海は教えてはくれないだろうけど。

「ありがとう。やっぱり彼女の事はよく分かってるんだね」
「だから……僕と浅海はそんな関係じゃないって」
「でも……いっつも空深くんと浅海さんって一緒にいるじゃない？」
「そういう機会が多いだけだよ。浅海も転校してきたばっかりで、でもあんまり友達を作るようなタイプじゃないみたいだし、たまたま席が近くて話す機会が多かったから話し相手として認識されてるんだ。僕は基本的に来る者拒まず、去る者追わず、だからさ」
「なら……私も空深くんのそばに行ってもいいのかな？」
「まあ、そりゃモチロン構わないけど。でも僕といても特に面白くないだろうし、先生たちからは、あかりちゃんを除いて嫌われてるし、漏れ無く真とかも付いて来るよ？」

それでもいいの、と尋ねると森川は、今度は嬉しそうに笑った。

「どうせ私も友達いないから。ほら、私ってドン臭いでしょ？　それに、みんなが話す話題にもついていけないし、話すの下手だし……」
「僕とは普通に会話成立してるけどね」
「うん……なんでだろ？　空深くんとなら話せるの」
光栄な事だ。ここにも僕と話したいなんて奇特な女の子がいるとは

ね。何となく恥ずかしくて僕は頭をポリポリと掻いてしまう。

「あっ……」

唐突に森川が声を上げた。そして眼をつむってしばらく黙ったかと思うと、突然立ち上がって走り始めた。

「おい、森川！　どこに行くんだよ！？」

どうも森川は人の話をあまり聞かない性質らしい。呼び止める声に返事もしないでそのままどっかに走っていくもんだから僕も走って追いかけるしかない。

確かに森川はドン臭い。走る速さも遅いし、人ごみの中を走るわけだから次から次に人にぶつかって謝って、なのにそれでも走るのを止めない。一応僕は森川を守る役目を浅海から言い渡されてるから見失うわけにはいかないのだけど、あれだけ派手に周りから蹴散らされながら進んでいけば見失うのも難しいというものだ。

少し離れたまま森川を追いかけること数分。森川は切らせた息もそのままに、一人の子供の前で腰を下ろした。三、四歳くらいだろうか、男の子は森川と一言二言言葉を交わしていたけれど、突然顔をクシャリと歪ませると森川に抱きついて大声で泣き始めた。

森川はその子を抱きとめると、優しく頭を撫でてあげていた。

「この子、迷子みたい。お父さんお母さんとはぐれて、ずっと一人で探してたんだって。不安なのに泣くのを堪えてたけど、緊張の糸が切れたみたい。でもエライよね……」

そう言うと森川は抱き寄せたまま、男の子が泣き止むまで頭を撫で続けた。それで男の子も安心したのか、少しずつ泣き声が小さくなっていく。やがて泣き止んで男の子が顔を上げると森川は肩を掴ん

で話しかけた。

「それじゃお父さんとお母さんを探しに行こうか？」

「……うん」

言葉少なに少年が頷くと、手を取って立ち上がる。

「迷子センターに連れて行く？」

「ううん、大丈夫。すぐに見つかるから」

森川は自信満々にそう断言すると、男の子の手を引いて歩き出す。男の子は、泣いたカラスがもう笑って、森川に懐いたのか話し掛ける彼女の言葉に元気よく答えていた。それを僕は後ろからただ眺めるだけだったんだけど、その姿は本当の姉弟みたいで違和感が無い。学校での大人しい森川はそこには無くて、頼れる姉の姿を見せているのが意外だった。それと同時に僕の胸の内で何かがひどく疼く。チクチクと刺すような痛みが内から外へと何度も苛んで、だから僕は二人の後ろ姿から眼を逸した。

「雄輔！」

そんな二人の前から、夫婦らしい男女が森川たちに向かって駆け寄ってきた。少年の両親だろう二人は相当息子の事が心配だったんだろう。雄輔、と呼ばれた少年を母親は力いっぱい抱きしめ、父親は安堵のため息をもらした瞬間、少年に向かってゲンコツを振り下ろしていた。そして森川に向かって何度も頭を下げていた。

「お姉ちゃん、バイバイ！！」

両親に手を引かれていきながら、雄輔くんは森川に向かって元気よ

く手を振って、森川もまた手を振って三人を見送った。そして僕は四人をただ眺めるだけだった。

「森川」

今日だけでもう何度目だろう、こうやって森川を呼ぶのは。笑顔を浮かべて森川がコッチを振り向く。そしてようやく状況に気がついたみたいに慌てて頭を下げた。

「あっ、ご、ゴメンナサイ！　いきなり走り出しちゃって」

「あ、いや、別に良いんだけど……」

森川がどうして距離のあった雄輔少年を見つけたのか、そして彼の親の場所が分かったのか想像はついてる。というよりも、僕が今知り得る情報の中では答えは一つしか無い。それでも、僕は聞きたかった。

「どうして場所が分かったの？」

言葉が色々と足りてないのに気づいたのは口にしてから。でも森川は僕の聞きたいことを正確に理解したらしく、困ったように表情を少し歪めて、そして僕の隣に立って歩き出した。僕は少しだけ彼女の後ろを付いていく。

「空深くんには教えてあげるね。その、信じられないかもしれないけど、私には未来が見えるの」

声を抑えたその言葉は予想通りで、雑踏の音色にかき消されそうなほどに小さかったけど僕の耳にははっきり聞こえた。

「さっきはあの子が泣いてる姿が見えて、雄輔くんを抱きしめてると、今度はお父さんとお母さんが探してる姿が見えたの。どこを探してるかって分かったから、私はただ連れていってあげただけなの」
「つまり、あのままでもあの男の子は親と会えたって事？」
「うーん、たぶんそうなんだけど……でも少しでも早くご両親に会わせてあげたかったの。だから気がついたら走り出してた」

置いて行っちゃってゴメンね、ともう一度僕に向かって謝ったけど、その言い方だとまるで僕が迷子にされたみたいだ。それが僕は気に食わない。その感情を押し殺して僕は更に疑問を口にした。

「もしそれが本当だとして、森川は……いつから未来が見えるの？　それから、どんな未来が見えるの？」
「えっと……中学校に上がったくらいから、かな？　だいたいはさっきみたいに小さな事ばかりだよ。誰かが物を落としたりするところを見て、それを拾ってあげたり、優勝したりするのを見て予めプレゼントを用意してたりとか。たまに誰かが怪我する場面を見ちゃったりして、その人に注意したりもしてたんだけど、そういうのは防げなかった。
最初は自分でも信じられなくて、でも私が言った通りのことばかり起こるから段々気味悪がられちゃって、黙ってるようになったの。昔は、なんで私にこういう力があるんだろうって相当悩んだんだけどね、でも私が手を差し伸べると誰かが助かるから。だからあんまり人には言わないんだけど、その分さっきみたいに一人で動き回っちゃうんだ。悪い癖なんだけどね」

周り見えなくなっちゃうから、と森川は小さく舌を出した。だけども、僕の中はグチャグチャだ。それは羨望といってもいいかもしれない。

「……悪い結果とかを見たりは？　それで誰かを助けるのが嫌になったりしない？」
「うーん……あんまりないかも。悪い結果って言っても、さっきみたいに怪我しちゃうくらいだから。それも誰かがこけて擦りむく程度だし。失敗しても取り返しがつかない結果になるわけじゃないし、それに、私がもう少し頑張れば未来が変えれたって思えるような事が多いから。だから次はもっと頑張ろうって思っちゃうの。その気持ちが強すぎて一人で突っ走っちゃう事が多いんだけど……」
「そう、か……」

それで僕の質問は終わった。口を開くのが億劫だった。口を閉じていないと、きっと僕の中に溜まってる何か醜いものが溢れ出してきそうだった。それの成分は多分に嫉妬を含んでいるだろう。
森川は絶望を見ていない。まだ希望しか見えていない。誰かを救うことができたから、自分にできることを疑っていない。
森川のしていることは立派だ。誰かを救うのに大事も小事も無い。その行為に貴賤は無くて、価値の大小もない。なのに、僕と森川が見ている世界は全く違った。
彼女には、誰かに容易く手が伸びる未来が見えて、僕には手が到底届かない絶望的な未来ばかりが見える。
不公平だ。知らず僕は胸の内で叫んだ。世の中、何もかもが不公平だ。この感情が所詮、世を斜に構えて見てる愚か者の八つ当たりだと気づいてる。
例えるならそれは、野球の才能に溢れる同級生を、野球が好きなだけでベンチにすら入れないヤツが抱くような嫉妬。
例えるならそれは、同じ授業を受けてるはずなのに遙か上の成績を取るクラスメートを見ているような感情。
例えるならそれは、スタートが同じはずだったのにいつの間にか遥か前を走る幼なじみを後ろから眺めるしかできない少年のような心境。

僕は、無意識に求めていたんだ。浅海から、僕と同じ力を持った人間がいると聞いて、同じ立場で理解し合える同胞とも言える存在を。同じ苦しみを共有し合える仲間を。
僕と森川は「未来を見える」という点においては同じなのに、手に届く結果はまるきり逆。裏切られた。勝手だと理解しているけど、その感情が拭えない。

「何か……マズイこと言っちゃったかな？」
森川の声でハッと我に返る。振り向けば、森川が申し訳なさそうに眉根を寄せていた。

「いや、突然の事だから戸惑ってるだけだよ」
「そう、だよね……急に未来が見える、なんて言われても信じられないよね」
「そうじゃないよ。……ここだけの話、森川と同じ力を持ってるヤツを知ってるから」
「そうなの！？」
驚きの声を上げた森川を尻目に、歩く速度を上げる。目指す先なんてどこにもないけど、足を止めてしまったら歯止めが効かなくなりそうだった。

「あの、すみません」
なのに、誰かが僕の前に立ちふさがった。
「そちらの女性は森川…恵さんで宜しいでしょうか？」
声を掛けてきたのは、背の高い、ひょろっとした印象の男だった。

顔は面長で、縁のないメガネを掛けてる。夏が近いっていうのに濃い目のスーツを着てて、暑いのかハンカチで額の汗を拭ってる。細くて少し垂れ下がってる目は気弱そうで、どうみても休日の遊園地に似つかわしくない。

「そうですけど……」

「おお！　やはりそうでしたか！」

森川が肯定すると、男は嬉しそうに声を上げて懐に手を突っ込む。そして一枚の紙を、ご丁寧にも森川だけじゃなくて僕にも差し出してきた。

「フジヤマテレビ、佐藤光則……？」

「ええ、実は私、フジヤマテレビの番組作成に携わっておりまして、ある番組の実験検証に森川さんにぜひ参加していただきたい、と思いまして……」

「わ、私ですか！？」

目の前の男はどうにも人の良さそうな、それでいて胡散臭い笑顔を浮かべた。突然の申し入れに森川は驚きはしてるみたいだけど、テレビに出れるとあってか、まんざらでもないみたいで、迷いながらも嬉しそうに声を上げた。

「ちなみに、どの番組なんですか？」

森川の前に出て僕が尋ねる。それでも男は笑顔を崩さずに、だけど少し困ったように丁寧な口調で説明してくれる。

「申し訳ありませんが、それはお教えすることができないんです。教えてしまいますと、その、実験の意味が無くなってしまいますの

で……」

たまにテレビで見る、被験者に実験の内容を教えないで何かしら事件が起きた時の反応を調べるようなものだろうか。余計な予備知識を与えない、という意味でその説明は理解できるけど、でもどうして番組のスタッフがこんな遊園地で声を掛けてくるのか。

「本来ならまずはお電話をさし上げて、番組に参加していただけるかご同意の方を確認するのですが、たまたま今日森川さんをお見かけ致しまして。ちょうど本日、この遊園地で別番組の収録をしていたんですよ」

そう言うと男の人は僕らの左の方を指さした。そっちに目を向ければ、確かに人が集まってテントの中にひとりずつ入っていってる。

「それで、どうでしょうか？　番組の方に参加していただけますでしょうか？」

手揉みをしながら腰を低くして森川に尋ねる。森川の視線は男と僕の間を行ったり来たりしてる。僕としては、僕の目が届かないところで動いてほしくはない。浅海に協力すると決めたし、森川に対して感情的に含む所があっても浅海が目的を果たせるように努力はするつもりだ。

そんな気持ちが森川に伝わったわけじゃないだろうけど、森川は小さく首を横に振った。

「あの、ごめんなさい……やっぱり私はそういうのは……」

「そうですか……残念ですが仕方ありません。無理強いはできませんしね」

たぶん他にも候補がいるのだろう。男の人は特に食い下がるわけもなくあっさりと諦めた。「お楽しみのところ失礼致しました」と言って、その声が聞こえて意識が男の方に戻った時にはもう人ごみの中に消えていた。

「良かったの？」

「うん。やっぱり人前に出るのは苦手だから……しかもテレビに映るなんて無理だよ。

それより、何か乗り物に乗ろ？」

僕の服の裾をそっと森川は引く。その提案に僕は気付かれない様にため息を吐いて、そしていつもの表情を貼りつけて森川に付き従う事に決めた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

浅海とは違う、森川の裏表の無い表情を眺めつつ休日の午後を過ごした僕らは夕焼けの鮮やかな帰路を辿っていた。昼間は晴れ渡っていたけど、今は西日を適度に雲が遮って眩しさは感じない。後ろにかなり長く伸びる影を振り返りもせず、ゆっくりと森川の歩調に合わせた足取りで森川の家へと歩く。

「ゴメンね。家まで送ってくれて……」

「もう暗くなるからね。女の子を一人で帰すわけにはいかないから。

そんな事したら真のヤツに何言われるかわかんないし」
「朝霧クンなら確かに言いそうだね」
小さく森川が吹き出す。
結局懸念されてた異変は何も起こらなかった。あのテレビマン以外に誰かが寄ってくるわけでも無く、僕の気づく範囲で不審な動きをしてるようなヤツもいなかった。強いて挙げるなら、森川があの後も何度か未来を見て突然に走りだし、僕がため息を吐きつつも後を追いかけるという件があっただけだ。
至って平和。全て事も無く、ただ単に森川のリクエスト通りに遊園地デートをしただけだ。もちろんそれが悪いことでは無く、森川も十分に楽しんだみたいだし、僕もまあそれなりに楽しかったから特段口に出して言うような文句も無く、いつもと違う休日を過ごすのもたまにはいいものだ、という感想を抱いたのだからまあ良いだろう。そもそも、僕しか近くにいない時に事が起こっても何も出来ないのだから、どちらかと言えば安堵の方が強いかもしれない。
微妙にストレスで重たい胃の事を意識してどっか端っこの方へ放り投げつつ、人通りのない住宅街の中を進む。森川の家が近づき、それに従って雲が知らず厚くなり、だから辺りは自然と暗くなる。ポツリポツリ、と街灯が光り始め、道に明暗を作っていく。
「今日はありがとう。私のお願いに付き合ってくれて」
「お願いと言うか、僕の隠し事を聞かないでいてくれる代償だからね。お礼を言われる立場じゃないよ、僕は」
「ううん、私がお礼を言いたいから。ゴメンね、せっかくの休みを私なんかのために潰しちゃって」
そう言って一歩森川は前に出る。うっすらとした夕日に背を向けてはにかむ。

「もうここまでで大丈夫だよ。送ってくれてありがとう」
「せっかくだし、家の前まで送るよ」
「大丈夫だよ。それに、お父さんとお母さんに見られるの恥ずかしいから」

森川は笑うけれど、でもその顔に浮かんだ表情は恥ずかしいというよりも、どちらかと言えば悲しそうな、残念そうな、言葉にうまくできないけれどそんな表情だった。どうしてそんな顔をするのか気になったけれど、だけどそこを追求するほど僕は森川の内にまで踏み込んでいないし、踏み込むつもりも無い。デートだって言ってみれば取引だし、そんな気持ちしか抱けていない僕が深入りしていい範疇じゃない。
森川の家までは後百メートルくらいだろうか。ここまで来れば大丈夫。何も起こりはしないさ。

「それじゃ、また学校で」

手を振る森川に僕も手を振り返し、彼女に背を向ける。さっきまで背後に回っていた影が今度は正面からうっすらと僕を見返してくる。かと思えば街灯がその姿をかき消して、次の瞬間には背後に現れる。僕は後ろを振り返った。家へと歩く森川の姿があった。
そして森川の姿が掻き消えた。僕の目の前からいなくなった。

「森川……？」

名前を呼んでも返事は帰ってこない。つぶやきにも似た僕の声が人のいない町に響いただけだ。

「森川っ！！」

距離にしてホンの十数メートル。まだ別れたばかり。全身から熱が引いていき、体の中から焦燥の熱が一気に燃え上がる。僕は走りだした。
数秒で森川が消えた角に辿り着いて、消えた方向を振り返る。
――いた
暗がりの中でいくつかの黒い影があった。そいつらに口元を抑えられ、引きずられるようにして森川は連れ去られてた。

「森川ぁっ！！」

彼女の名前を叫ぶ。視界の中の彼女の目が大きく見開かれて、目元に涙を浮かべているのがなぜか分かった。
足に力がこもる。必要以上に入った力に筋肉がはちきれそう。酸素を求めて心臓を急かす。急かされた心は頭をかき乱して、ただ僕の足を前へ前へと動かす。
油断した油断した油断したっ――！！
最後まで気を抜いちゃいけなかったのに最後の最後で手を抜いてしまった。
浅海は言ってた。家の近くで森川は誘拐されると。だから最も警戒すべきは森川が家に入る直前だったはずなのに！
完全な失態だ。これまで僕が救えなかった人たちとは違う、完全に僕自身のミス。ならば何を捨ててでも僕自身の手で挽回しなければならない。
森川を連れた男たちの前に黒いワンボックスカーが急停止した。ドアがスライドして、中から別の男が手招きしている。
――まずいっ！　あれに乗り込まれたらっ……！

「クソッタレェッ！！！」

前に向かって体を投げ出す。手を伸ばして倒れこんだ僕の手は、か

ろうじて森川の足に届いた。それを僕は力いっぱい握り締める。

「……、……っ！！」

頭上から何らかの怒鳴り声が聞こえる。言葉は日本語じゃない。けれど何語かなんてまで僕の知識じゃ分からない。ただ罵倒だろうというのは、声のニュアンスから理解できた。

頭に衝撃。痛みに目をつむり、片目で見上げれば硬い靴の底が目の前に迫っていた。

頭と手に骨が軋むような痛みが交互に振りかかり、手から力が抜ける。一瞬、痛みに負けて森川から手を離してしまいそうになる。挫けそうになる自分を叱咤し、強く奥歯を噛み締める。

不意に攻撃が止む。諦めたのか？有り得ない妄想が頭を過ぎって、そして次の瞬間にはそれが所詮都合のいい空想に過ぎなかった事を激痛が教えてくれた。

「がああああっ！！」

右手から力が抜ける。痛みの元である二の腕をそっと見れば、人間の体には無い鋭く光る刃が突き立っていた。

ナイフが腕から引き抜かれる。気が遠くなりそうな痛みを伴ってドス黒い汚れた血が腕を伝って白いシャツを濡らす。嗅ぎ慣れない匂いが僕の鼻腔に入り込んできて、痛みと一緒にクラクラと頭を揺らす。

「……！」

また何か声が掛けられる。痛みの衝撃で急に言葉が理解できる、なんて事も無い。痛みに阻害された頭で理解できたのは、たぶん、僕はこのまま……死んでしまうだろう、ということ。

激痛に沸いた頭が冷える。手から力が抜ける。手のひらに感じていた森川の温もりが無くなる。
見上げた視界に刃が入り、カチカチと音が鳴った。止まない、止まない、音が止まない。恐怖に凍えた歯が何度も僕の意思に反してぶつかり合い、耳障りな音を立てていた。
怖かった。死にたくない。死にたくない。死にたくない。頭の中が「死」という言葉だけで埋め尽くされる。
いつ死んでも構わないなんて、そんなものは死を遠い存在だと感じていた人間の戯言に過ぎない。父さんと母さんの死なんて、所詮は身近な他者のものでしか無くて、僕のものでは無かったんだ。
生きたくないの対義語は死にたい、では無かった。ただ自分で選ぶ事も放棄した、卑怯で臆病な生者のたわ言だと理解してしまった。
それでも僕の左手は森川をつかんで離さない。怖いのに、ナイフが、迫り来る恐怖が怖いのになぜだか手は離れない。頭では離せと叫んでも、何か強い力が拒絶してる。
ナイフが振り下ろされた。僕の顔目掛けて。ゆっくりと、コマ送りの様に刃が大きくなる。けれど、僕には避けることも、防ぐこともできなかった。

そして暖かい飛沫が顔に掛かった。ペチャリ、と音を立てて、だけどもそれは僕のものでは無かった。
ナイフを持っていた男の体が崩れる。ナイフが地面に落ちてカラン、と響き、何かが頭上を通ったと思うと男の体が吹っ飛んでいった。
そしてもう一人の男も巻き込んで車から転げ落ちていく。

「きゃっ！」

悲鳴と一緒に僕の頭上に何か柔らかいものが覆いかぶさる。その重みにグェ、と僕の口からは潰れたカエルみたいな声が漏れてしまった。

「ご、ごめんなさい、空深クン！！」

声を聞いてようやく上に乗っているのが森川だと気づいたけれど、でもどうしてそんな状態になっているのかつかめなくて、僕の頭は混乱するばかりだ。

「早く逃げろ！　ココはアタシたちに任せときな！」

鋭く、けれど暖かみのある言葉が僕らに掛けられた。そこにいたのは女性で、黒髪をショートにしていて、全身を黒い服で固めていた。それが周囲の暗さと混じって完全に溶け込んでいた。いったい何が起きたのか。森川は助かったのか、僕は助かったのか、僕はまだ生きているのか。グルグルと回る思考のループから抜け出せず、僕も森川も呆然とするばかりで動けない。

「オラオラ！　さっさと逃げねーと怪我するぜ！！」

また一人増えた。今度も全身を黒で固めて、だけど髪だけは金色でそれが印象的。声から男性だろうとは思ったけど、そこでようやく僕の意識は今すべき事に向けられた。

「立って！！」

僕は立ち上がった。森川の手を引いて、強引に立ち上がらせると返事も聞かず僕は走りだした。

どこの誰だかは知らないけれど、今しかない。強く左手を握りしめて、彼らとは逆の方向に向かって脚を踏み出す。

「空深クン！　腕から血が……！！」

「そんなのは後だ！！」

角を曲って、森川の家とは逆向きに向かう。家の前は奴らの仲間がいるかもしれない。ともかく、今は何よりもこの場を離れるべきだ。もつれそうな脚を血のついた右手で叩いて叱咤する。一分でも一秒でも早く前へ進め。今、僕ができること。それを滞り無く遂行するんだ。

そうして僕と森川は、暗くなった町の中を全速力で駆け抜けた。

―５ｔｈ―　狂々、繰々（くるくる、くるくる）

―５ｔｈ―　狂々、繰々（くるくる、くるくる）

どれくらい走ったのだろうか。五分か十分か、はたまた一時間近く走っただろうか。
そして僕はどこをどう走ったのか。ここまでの景色を全く覚えていない。単色の似た家々が並ぶ住宅街を駆け抜けたのは覚えている。だけども、ネオンの輝く国道沿いに出てからは何もかもがはっきりしない。
感覚が完全に麻痺して疲れも今、自分がどれくらい疲労しているのか分からない。息が荒いのは走ったからなのか、それとも先ほどの異常事態に体が警告を発しているからか。ずいぶん前からその警報は発せられていたような気もするけれど、それに気づかないふりをして僕は走り続けた。

「ご…めん……ちょっと、待って……」

左手の先からの声に、僕は足を止めた。振り返れば、森川は膝に手をついて息も絶え絶え。ようやく僕は、走っていたのが僕だけではないという、当たり前過ぎる事に気がついた。

「ご、ごめん……」
「う、ううん……だい、じょうぶ、だけど……ちょっとだけ……」
汗で額に張り付いた前髪を払いのけながら森川は力なく笑った。
僕も呼吸を整える。そこでやっと周りを見る余裕を取り戻した。
一見この街のどこにでも有りそうな町並み。静かで、まだ夜も浅いのに人通りは無い。少し離れた国道からは、昔のガソリンエンジン自動車を真似た音が響いてきてる。
その中で特徴的な大きなビルが異彩な光を放つ。百メートルを越す高層ビルと、その周りを取り巻く様に林立するやや低めのビル群。中心に建つビルの屋上には「ＩＨＦＬ」の文字が踊っていた。距離はかなり離れている。なのにそれがココから見えるのは、ここらが古く低い建物が密集しているから。
そう、僕はこの場所を知っている。ここは、僕の住む町だ。

「は……ハハ……」

どれだけ必死に逃げまわっても、どれだけ自分を見失っても、結局帰ってくるのは我が家と言うことか。それとも、無意識下で浅海が何とかしてくれる、なんて他人任せで無責任な考えでもあったのだろうか。どっちにしても情けない。思わず笑い声が出てしまったくらいだ。
無責任、と言えば。未だ必死に呼吸を整えてる森川を見る。
彼女を守ると浅海から課され、自分でもそれを請け負ったにもかかわらず最後の最後で晒した醜態。そして逃げるのに、生きるのに必死で、今の今まで彼女を連れていた事を忘れていた無責任さ。まったく、ひどく情けなくなる。なにが誰かを助けたい、だ。誰かを救けることで自分が救われる、だ。心理学者ぶって自分を分析して、分かった気になって、その実、自分が結局一番生きるのに必死だったという事実。思い返してみても反吐が出そうだ。

だけど。
今はそんな反省も後悔もどうだっていい。まずは安全を確保することが最優先だ。
そういえば、浅海は無事なのだろうか。今日の浅海の行動を把握しているわけじゃなく、だけどもどういうわけか一緒に生活するようになって、夕飯の時間には必ず家にいて料理を作っている。その生活パターンに沿っているのなら、今の時間はウチにいるはずだ。
あくまでターゲットは森川のはずだ。だから、浅海に何かが起きているとは思いづらい。
しかし、だ。それはあくまで相手が浅海を一般人だと認識してる場合だ。

（もし、万が一、森川を監視している事が相手にバレていたら――）

嫌な想像だ。だけど、何が起きているか僕には正確に分からない以上、最悪を想定するべきだ。
気持ちの悪い汗が流れ落ちて、それを左腕で拭う。

「森川。動けるか？」
「……だ、大丈夫。でも……どこに行くの？」
「ウチ」
浅海をほっとけるわけがないよな。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

辺りを警戒しながら歩くこと五分程度。森川の手を引きながらそっと塀越しにアパートを覗き込んだ。
僕のアパートは全部で十部屋。そして僕が把握している限り、その内の四部屋に住人がいる。そのはずなんだけど、今はどの部屋も灯りがついていない。全ての部屋が真っ暗で、誰かがいる気配が無い。それは僕の部屋も例外じゃなかった。
他の部屋と同じように一階の部屋に電灯はついてない。けれど、ほんのりと夕飯の香りが漂ってきてた。つまり、今の今まで浅海は部屋にいたということで――

（出かけてる？　それとも、まさか……）

どうにもダメだ。嫌な想像ばかりが頭に過ぎってしまう。
何も起きてない。浅海はただちょっと買い物にでも出てるだけ。そう言い聞かせてドアの傍まで静かに近づき、ドアに耳を当てた。
家の中からも外からも音はしない。音はしないけど、妙な予感がする。それは未来視とかそういったものじゃなくて、単なる勘の域をでない。そして、何より役立たずなのは、その予感がドアを開けた時に具現化するものなのか、それともこのままこの場を去った時に発現するのか分からないということ。

（賭けてみよう……）

なら悩むだけ無駄というモノ。判断するにも情報は無いし、時が過ぎて状況が変わるのを待つ選択も無い。ドアを開けるか、ここから去るか。二つに一つ。結果は髪のみぞ知るってところか。

ドアノブに手を掛ける。そして一気にドアを引き開ける――

「どわぁっ！」

つもりだったけれど、ノブに手を掛けた途端に内からドアが押し開けられて、中に引き込まれた。そして、頭に何かを押し付けられた。

（しくじった……！）

口元を抑えつけられ、硬直する体。頭につきつけられているのが何かなんて、簡単に想像がつく。左手でつかんでいた森川の手を離さなかったのは幸運なのかそれとも不幸だったのか。僕としては一人じゃなくて幸運だったかもしれないけど、森川にとっては不幸か。さっきまで怖い思いして、助かったと思ったらまたこんな状態。あまりにも自分が無様過ぎて、笑いさえ出てこない。ほら今もこうして恐怖にひきつった顔をして――

「……？」

森川は呆然として僕の方を見上げてた。背中を畳に倒れこむような表情で、でもその顔に恐怖の色は見えない。どういうことだろうか。僕を引きずり込んだ相手の顔を見ようと、静かに振り向こうとする。だけど、その行動も頭に押し付けられた拳銃で押し留められて、代わりに囁く声が耳元に届いた。

「動かないで」

もう聞きなれたその声は浅海圭その人のもので、つまり、僕は浅海に背を預ける形になってるわけで。

「……」

頭の横に拳銃。後ろには浅海の胸の柔らかさがあったりする。
この非常時に何を考えてるんだ、と言われそうだけど、そうは言っても気になるものは気になる。
少しだけ、頭を動かして浅海の顔を伺う。暗闇の中で浅海は壁に背を預けて、じっと玄関の方を見つめてる。その顔は真剣そのもので、とても茶化せる空気じゃないから、僕もまたじっと浅海に口を抑えられた状態で時が過ぎるのを待った。
僕ら三人、声を発することもできず身動ぎさえ許されないような張り詰めた空気の中で耐えていた。それを破ったのは浅海だった。

「こちら浅海」

ポケットから取り出した無線器を耳に当て、硬い声を浅海は発した。そして二、三言言葉を交わして舌打ちをすると「了解。お疲れ様」と短く相手に告げて無線を切った。それと同時に僕を拘束していた力も解かれて自由になる。

「もうしゃべってもいいわよ、二人とも」

浅海はそう言って立ち上がって、そして部屋の灯りを点け、そこで浅海の全身が顕わになった。
全身を覆う真っ黒なスーツ。足にはゴツイ軍隊が使うようなブーツを履いて、上半身には防弾用らしいプロテクターを着てる。右手の中には黒い拳銃が握りこまれていた。
戦闘服、というのだろうか。今までどこに隠し持っていたのかしらないけれど、機能性を重視したであろうその服は、ピッタリと浅海の体にフィットしてスラリとした体型をそのまま表していた。

「あ、浅海さん……？　どうしてココに……？」
「どうしてって、私がココに住んでるからよ？　ああ、もちろん空深くんも一緒にね」
「なっ！？　そんな……！　こ、高校生で同棲なんて……」
……まあ、そう思うよな。実際は恐らく妄想好きな森川が妄想してるような甘い展開は一切無くてむしろ残念過ぎる日々だとしても。表情が雄弁に語る森川に対して、浅海はなぜか勝ち誇ったように眼を細めて笑う。
「あら？　もしかして羨ましかったりするのかしら？」
森川の口から「ぐぬぬ……」なんて声が聞こえてきそうだった。それに対して浅海は胸を張って「フフン」と鼻で笑ってみせる。なんだ、森川の事が嫌いだと思ってたけど、実はそうでもないんじゃないか。
昨日までの空気が戻ってきたみたいで、ホッと息を吐き出すと安心したからか、急に力が抜けて眠気が襲ってきた。体が右に倒れ、それを支えようと右手を床に差し出した。けれど――
「あ、れ――」
ヌルリ、とした感触がしたかと思うと、そのまま何故か体が横に倒れていく。
「さりげなく横になってまでスカートの中をみたいだなんて――って、アンタ、その傷……！」
傷？ああ、そう言えば僕は怪我してたんだっけ。
他人事の様に思いながらまぶたが閉じていくのに気づき、それに抗

う気も起きなかった僕はそのまま眼を閉じた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

カンカンカンカン――

僕を乗せた電車が夕焼けの中を走り抜け、踏切の音が高くなりながら近づき、そして低くなりながら遠ざかる。建物の影が車内を通り過ぎ、僕の目の前を一瞬で横切っていった。僕は一人八人掛けのシートに座っていた。他に誰もいなくて、隣の車両にも、そして運転席にも人はいない。

薄暗い車内で僕は自分の手を覗き込む。

助けられた。その言葉が僕の中を駆けまわる。走りまわって走りまわって、歓喜が胸の奥から沸き上がって来る。

長かった。本当に長かった。僕の手の中には温もりが残っている。

初めて僕の手で救けることができた、森川の体温がまだ残っていた。

確かめるように僕はその手のひらを強く握り締める。

今までと違ってたくさんヘマをした。だから森川を助けられたのは奇跡にも等しいかもしれない。それでも、それでも僕はやっと成し遂げたんだ。

僕は、救われたんだ。

夕闇の電車で一人、満足感に浸る。

「本当にそう思ってるの？」

声がした。誰もいないはずの車内からそれは聞こえてきて、顔を上げたら正面に誰かが座っていた。
逆光になっていて相手の顔は見えない。だけど、シートから伸びた足が床につかないほど体は小さくて、聞こえてきた声も幼い。
いつの間に――
突然現れた少年に驚く僕を尻目にして、男の子はクスクスと笑い声を立てた。

「だとしたら、お目出度い頭だよね。笑っちゃうよ」
「……誰だよ、お前」
「僕のことなんてどうでもいいよ。それよりお兄さんの事が大事さ。もう一度聞くよ？　本当に自分の力であの女の人を助けられたって思ってるの？　本当に――自分が救われたって思ってる？」

ドクン。心臓が大きく跳ねた。
思ってるさ。確かに僕だけの力じゃなかったかもしれない。けれど、大切なのは結果だ。結果として森川は助かった。それに力を貸した僕も救われた。どこに間違いがあると言うんだ？

「そうやって誤魔化すんだ？　いつだって君はそうだ。自分を騙して、欺瞞に満ちて、そのまま自分を誤魔化し通す。なのに本当は騙されたフリをして、諦めたフリをしてるからいつまで経っても奥底に消化しきれない膿を抱えてる。今回だって救われた、だなんて微塵も思っちゃいないくせに」

そんな事はない。僕の心はすっきり晴れやか。これ以上望むものなんてないさ。
なのに。心臓は警鐘を鳴らしているかのように次から次へと鼓動し、目の前の景色がグニャリと歪んでいく。

耳鳴りのする鼓膜に、少年は更に負担を強いる。やめろ、それ以上言葉を紡ぐな。口を開くな。その汚い口を閉じていろ。

「ならどうしてこんな所にいるのさ？」

「え？」

「満たされたのなら、本当に救われたのならお兄さんはこんな所にいやしない」

「何が言いたいんだよ？」

「さっきも言ったじゃないか。お兄さんは救われてやいないって。だって――」

彼女を救ったのはお兄さんじゃないから――

そう言って目の前の少年は大きく口を歪めて哂った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「きゃ！」

寝苦しさに僕は跳ね起きた。前髪がたっぷりと汗を吸って重くしなだれ、全身に掻いた汗をシャツが吸って重みを感じるほど。心臓が苦しくて肺がうまく膨らまなくて、息を吸う度にまるで喉に穴が開いたみたいに乾いた音を立てていた。

手を突いた右手に疼痛が走って僕は顔をしかめた。触れた左手に包

帯の感触が伝わり、それが僕に夕べの出来事が夢でないことを教えていた。

「だ、大丈夫？」

恐る恐る、といった感じに森川は声を掛けてきてくれて僕の顔を覗き込み、彼女の瞳に歪んだ僕の姿が映り込む。だから僕は彼女から顔を逸らして、目元を揉みほぐす仕草をして誤魔化した。

「ああ、うん、大丈夫。それより、夕べはどうなったんだっけ？」

森川を助けて、浅海も無事でどうやら事態は収集したらしくて安心したところまでは覚えてるけど、そこからは記憶がプッツリと途絶えてる。途中で寝てしまったみたいだけど、僕が寝てる場所はここ最近浅海が占領している僕の布団の上で、そこから見える部屋の風景もいつもと変わりないから何事も起こらなかったんだろう。

尋ねながら、姿勢を変えようと体をよじる。そこで僕は体に掛かる重さに気がついた。

「空深くんが気を失った後は大変だったんだよ？　腕から血がダラダラ出てるし、それを見た浅海さんが取り乱すし……」

「浅海が？」

僕の脚に覆い被さるようにして眠っている浅海の寝顔を見る。

意外だな、基本的に落ち着いた雰囲気の浅海が取り乱すなんて。自分でも忘れてたけど、確かに僕の怪我は相当なものだった。けれども昨夜見た、武装した浅海の姿は様になっていた。軽そうな体と対照的に、無骨で重量感ある銃を持って扉の向こうを見据える浅海は明らかに場慣れしてる様子だったし、そうであるならば僕程度の怪我人は見慣れてその処置方法もお手のものだろう。出血量は多かっ

たかもしれないけど、即座に命に関わる程でも無い。それとも、僕の勘違いで内心では戦闘に慣れてないのか。

「浅海さんが起きたら空深くんもお礼を言わないといけないね。一人で治療も全部やっちゃって、さっきまで空深くんの看病してたんだよ」

「起きたら言っておくよ。それと……森川もありがとうな」

「私？　私は……何もしてないよ。オロオロするばっかりで、実際には何もできなかったから。すごいよね、浅海さんって。あんなに取り乱してたのに、すぐに立ち直ってテキパキと動いていくの。学校でも美人で人気があるし、運動神経も抜群で頭も良いし、何でもできる。私なんかとは大違い……」

顔を伏せて森川は泣きそうな顔をする。そして呟いた。

「傍にいない方がいいのかなぁ……」

「え？」

「えっ、あっ、ううん、なんでも無いよ！　そ、それよりも！　今日は一日安静にしていてね！」

そう言って立ち上がって森川は流しの方へ向かう。台所では鍋が火にかけられていて、コトコトと音を立ててる。炊飯器の電子音が鳴ってご飯が炊きあがった事を教えてくれて、森川もコンロの火を止めた。手際良く朝食の準備をしていってるから、きっと森川も普段から自分で作ってるんだろう。

と、布団の上で浅海がもぞもぞと動く。匂いに釣られたわけじゃないだろうけど、何ともいいタイミングだな。

「……おはよう」

眼を半分だけ開けて、ぬぼーっとした表情で挨拶だけはしてくる。けれどいかにも眠そうで、僕の方を見たまんま固まった。
しばし沈黙。森川は浅海が起きたことには気づいてるみたいだけど、今は準備の方に集中している。半分眠ったまま浅海が見つめ、なぜだか眼を逸らしたら負けな気がして何食わぬ顔で見つめ返してやって、その結果何も生み出さない不毛な時間が生まれたりしてる。

「お風呂入ってくる……」

寝ぼけ眼のまま、のそのそとした動作で浅海が立ち上がる。
そしてその場で服を脱ぎ始めた。

「ぶっ！　ちょっ、浅海！！」

いやいやいやいや、寝ぼけてるにも程があるだろう！今まではずっと浅海の方が僕より起きるの早かったから気づかなかったけど、もしかして浅海は毎朝こんな状態だったのか！？そして僕はこのうらやましい景色を見逃して……じゃなくて！

「どうしたの……ってきゃあああっ！？　何をしてるんですか、空深くん！？」
「違う、俺じゃない！　浅海が勝手に脱ぎ始めたんだ！」
「だったら早く止めてください！」
「わ、分かった……って、おい！？」

パサァ、と浅海の体を覆っていた最後の砦が取り払われて見事な肢体が僕の目の前に――

「見ちゃだめえええええっ！！！」
「ふぼあっ！？」

森川のじゃん拳が目に突き刺さる！僕は目の前が真っ暗になった！

「ごめんなさい！　浅海さんをお風呂に連れて行ってきますからちょっと待ってて！！」

眼を抑えてゴロゴロと転がり回る僕に声を掛けると、二人の足音が遠ざかっていく。

僕……何か悪いことしましたか？

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「さて、せっかくだからご飯を食べながら話をしましょうか」

ちゃぶ台に並べられた良い香りが漂う朝食を前に浅海が切り出す。テーブルの上には白ご飯に白味噌の味噌汁、それに目玉焼きと定番のメニュー。結局夕べは何も食べられなかったからか、匂いを嗅いでいるだけで唾液が口の中に広がっていく。

シャワーを浴びる前までの浅海の姿はもうどこにも無くて、すました顔をして味噌汁を一口飲む。朝っぱらからの惨事を知ってか知らずか、まったく気にした様子が無いのが恨めしいからちょっと睨んでみたら思いっきり睨み返された。朝から睨み合いするのも疲れる

から僕の方から眼を逸らす。決して浅海が怖かったからではない。ズズ、とここ最近飲み慣れた味の味噌汁を一口。うん、美味い。

「森川さんもずっと気になってるでしょ？　どうして自分がさらわれそうになったのか」

「はい……でも、聞いたら教えてくれるんですか？」

「ここまで来たら隠してなんかいられないわ。本当はアナタには何も気取られずに事を済ますつもりだったのだけど、こっちとしても色々と予想外の事が起きてる以上、話せる範囲の事は全部話してあげる。その代わり、森川さんも私たちと一蓮托生。協力してもらうからそのつもりでいなさい」

「……全部自分の身に関わること、いいえ、空深くんにも怪我をさせてしまいましたし、周りにたくさん迷惑を掛けてる以上他人顔をするつもりはありませんから」

「良い覚悟だこと。とは言っても、森川さんにしてもらう事はほとんど無いんだけどね」

森川はご飯に箸もつけず、正座して緊張した様子で浅海の話を聞いてる。対照的に浅海は次から次へと朝ごはんを口に運んでるんだけど、それでも下品な感じがしないのはなんでだろう？

「アナタにしてもらうのは、森川さんを取り巻く状況を知ってもらうこと、そして事が起こった時に私たちの指示に逆らわずに従ってもらうこと。それだけよ」

「それだけでいいんですか？」

「ええ。どうせアナタは素人だし、難しい事はできないでしょ？私たちの邪魔さえしなければそれでいいわ」

僕は横で黙って聞いているだけだけど、やっぱりどうにも浅海の言い方は険がある。口の悪さは僕に対する方が悪いんだけど、森川に

対する時は逆に口調は丁寧でも嘲りとかそういった類のものがあって、それは浅海が森川の事を嫌っているんだという確信を僕に抱かせるには十分だった。
当然そんな空気は直接受けている森川に伝わらないはずは無い。珍しくムッとした表情を浮かべて浅海を見ている。

「それを言ったら空深くんだって素人じゃないんですか？」
「少なくともアナタよりは役に立つわ」

このままじゃ話が進まない。二人の間に広がる雰囲気ばかりが悪くなるだけで、時間が無駄に掛かるばかりだ。それはきっと二人の本意じゃないだろうし、僕としても不本意。というより気分が悪い。せっかくの朝ごはんが台無しじゃないか。

「浅海」
「空深くんは黙ってて。今は私が話してるんだから」
「それなら、森川に何を含んでるのかは知らないけど、さっさと話を進めてくれ。少なくとも僕らは森川に協力を頼む立場なんだ。相手の神経を逆なでするような真似は止めろ」

そう言い放つと僕はご飯を口に運んで味噌汁を飲む。暖かい汁が胃に流れ込んで少しささくれだった心が落ち着く。
浅海はうつむいて一つため息をついた。

「そうね……失礼したわ。ごめんなさい、森川さん」
「森川も、これで許してくれないか？」
「え？　あ、いえ、私は別に……」

森川も面食らったらしく、バツが悪そうにうつむいてしまった。浅海はパンっと自分の顔を一度両手で叩くと、姿勢を正した。

「それじゃ改めてお話するわ。森川さん、アナタを取り巻いている状況について」

そうして浅海は話し始めた。

話は三十分くらいだっただろうか。話した内容はこれまでに浅海が僕に聞かせてくれた内容と大差は無くて、目新しい情報は無い。話し終えた浅海は茶碗の上に箸を置くと、手を合わせて「ごちそうさまでした」と言って僕の方を見た。

「まあこれは空深くんにも話した内容ね。ここからは質問に答える形にするわ。もちろん、空深くんも質問しても問題ないわ」

「なら早速だけど」コップの水で喉を潤して浅海に尋ねる。「昨日の事について詳しく教えてくれないか？」

「そうね……とは言ってもどこから話せばいいかしら……」

「昨日の敵と、僕らを助けてくれた人たち。それと、浅海の事も」

これまで浅海は単に「敵」がいるとしか教えてくれていない。そして、頼れる人は限られている、と。つまりは未だに敵が何者なのか、そして誰が味方なのかそれさえ僕は知らない。浅海から教えてくれるまで黙っていようと思ったけど、もう昨日の一件で僕もどっぷりと浅海たちの事情に浸かってしまった。当事者たる森川本人もいることだし、もう教えてと言っていいだろう。

「それじゃあ昨日、森川さんたちを襲った相手について話すわね。犯行グループは確認されてるのは三人で、それは空深くんたちが見た人数と違い無いわよね？　いずれも北朝鮮国籍の工作員で、十中八九森川さんの能力を聞きつけた国のトップからの指示でしょうね。将軍家が途絶えても結局は支配が金一族から軍のトップに変わっただけの独裁政治に変わりないわけだし、去年の収穫は不作で、

国連からも支持されてないわけだから各国からの支援は無し。森川さんを手中に納めて、未来を読んだ交渉をアメリカ当りに仕掛けようとしても仕方ないわね。そんなに都合よくいくはずがないのに」
「私にそんな力無いのに……」
「本人じゃない限りそんな事は分からないわ。そもそも未来を見る、なんて能力自体がまだ誰にもよく分かってないもの」

しかし、相手は「国」か。それじゃ警察なんか頼りにならないし、話は政治的な問題になるだろう。明るみに出たところで国が動いてくれるかも分からないし、下手すれば世間のあずかり知らぬ間に全てがもみ消されて無かった事にされてしまいそうだ。少なくとも僕はその程度にこの国の政府を信用していない。

「でも、まさかあの国が先に動き出すとは思わなかったわ。いえ、私が知ってる未来を過信しすぎたのが原因ね。空深くん以外に怪我人がいなくて良かったわ」
「なら、昨日私たちを助けてくれたあの人たちも怪我は無かったんですね？」
「ええ。榛名もアンディも――昨日二人を逃した奴らね――怪我なく相手を制圧したわ。もっとも、工作員の三人は自害したけど」
「え？」
「恐らく私たちを警察か、この国のＣＩＡみたいなものと勘違いしたんでしょうね。情報を漏洩されないように、工作員に捕まった時には自殺するよう訓練されてるんでしょ。まあ別にあの国の情報なんて特に欲しくも何とも無いからいいんだけど」
「いや、敵の情報は重要じゃないか？　情報の価値に差はあるだろうけど、要らない情報なんてないだろ？」
「そりゃ敵の情報なら私だって欲しいわよ。でも敵でも何でもない、横から手を出してきただけの相手の情報なんて重要でも何でも無いわ」

「敵、じゃない……？」
「ああ、でもこれ以上横槍入れられない様に、という意味だと情報は欲しいわね」
「ちょっと待ってくれ、浅海。昨日のは何だったんだよ？」
「今、言ったじゃない？　朝鮮半島の北側の連中が手を出してきたって」
「あの……もしかしてなんですけど、私は本当は昨日さらわれるはずじゃなかったって事ですか？　その、浅海さんが知ってる未来だと」
「だからそうだって……ああ、そっか、ごめんなさい、そこをまだ伝えてなかったわね。すっかり伝えたつもりになってたわ」

額に手をやると浅海は一息ついて長い髪を一度掻き上げる。僕と森川が固唾を飲んで次の言葉を待つけど、浅海は立ち上がって窓の方に向う。窓を開けると朝の爽やかな風が室内に吹きこんでくる。浅海の長い髪の毛が風になびき、甘い香りが鼻をくすぐった。
こちらを浅海は振り向く。浅海と隣のアパートの隙間からは遠く離れた、毎朝眺めている巨大な建物が見える。
浅海はその建物を親指で差して宣言した。

「ＩＨＦＬ――国際生命科学研究所。あれが私たちの敵よ。そして」
今度は僕らの方に戻ってきて、恭しく頭を下げた。
「私たちの組織――クロトにようこそ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7024y/

No One Knows Everything

2012年1月9日19時46分発行